**№45　テーマ『この命を何の為に使うか』**

**講話日2004年7月26日**

**司会：それでは、芳村先生、お願いいたします。**

**芳村：はい。皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：本当に毎日、猛暑というよりも、本当にもう酷暑でですね、皆さん方も本当にお仕事、大変なことと思いますけど、どうぞ乗り越えて、元気で頑張ってもらいたいと思います。で、今日の話は、「この命を何の為に使うか」ということで、これは人生哲学の根本問題、人生哲学の根本命題というふうにいわれる、人生を考える一番根本のですね、課題というふうに言うことができる問題なんですね。で、どうして、その人間がこの生きるということの場合ですね、人間的に生きるということをする場合、この命をなんのために使うかという、この問題について考えることが要求されるのか。その理由がですね、３つあります。で、それでまず１番目のですね、人生哲学の根本問題というところで、３つの項目、書いてありますけども、それがこの、なぜ人間が人間的に人生を生きていこうとする場合、この命をなんのために使うか。この命の使いどころというものを何に定めるか。このことをまず考えなければならない。その理由が３つあるわけですね。**

**その第１番目はなんなのかと申しますと、第１番目は、人間が生まれてくるのはいったいなんのためか。自分はいったいなんのために生まれてきたのか。これはこのちょっと物事を真剣に考える方ならば、誰でも１回か２回は持った疑問だと思うんですけども、いったい人間はなんで生まれてくるのか。なんのために生まれてくるのか。自分はいったいなぜこの時代に生まれてきたのか。そのことをですね、まず考えなければならない。で、人間が生まれてくる理由はですね、まずはこの新しい時代をつくるためです。歴史をつくるためです。生まれてくる人間がなくなってしまったら、人間の歴史は終わってしまいます。その意味で、人間が生まれてくるということの最も根底にこの歴史をつくるという仕事があるわけですね。**

**新しい時代を呼び起こすという仕事があります。で、現在よりもっと素晴らしい時代をつくるという、そういうこの使命を持ってですね、みんな生まれてきてるんですね。で、新しい時代をつくるためには何が必要なのか。新しい時代をつくり、歴史をつくるためには、今よりもっと素晴らしい理想を持たなければならない。今よりもっと素晴らしい夢を持たなければならない。今よりもっと、この素晴らしい志を持たなければならない。今よりもっと素晴らしい目的というものをですね、人生においては掲げなければ、歴史はつくれません。今よりも低級な、低レベルなことを考えておったんでは、これは話にならない。すなわち、時代がこの逆戻りすることになりますからね。また今と同じレベルで物事を考えておったんでは、時代を保守化してしまってですね、その新しい時代をつくる、より素晴らしい時代をつくるっちゅうことはできません。**

**だけど、なぜ人間は、この新しい時代をつくるというですね、今よりもっと素晴らしい時代をつくるということができるのか。なぜわれわれは、歴史をつくるために生まれてきたというふうに言うことができるのか。それは、生まれてくる子は、常にその前の段階のですね、前の時代の人間たちをはるかに超えた潜在能力を持って生まれてくるんです。これはどういうことなのかといったら、おぎゃあと生まれ出てくる子どもはね、お父さん、お母さん、両方から遺伝子をもらって生まれてくる。だから、生まれた途端に、もうその子は、潜在能力においては、一個の父親を超え、一個の母親を超えて、それ以上の仕事ができるという潜在能力を持って、みんな生まれてきてるんですね。ですから、よく、いつも時代、その時代の中でいわれることですけども、今の若い者はといってですね、われわれの年代からすると、どうもその若い人たちが頼りないと。なんかもうちょっとしっかりしてほしいと思うような、そういう気持ちになるんですよね。だけども、実際、歴史を振り返ればですね、その頼りないといわれておった若者が、必ずわれわれを超えて、より素晴らしい時代をつくってきたのが、これまでの歴史の実証であります。**

**で、なぜ、その新しく生まれ出てくる子どもたちが常により素晴らしい時代をつくると、結果を出すことができるのか。それは、生まれ出てくる子どもたちは、両親から、お父さん、お母さんから、２人の人間から遺伝子をもらって、そして、その前の段階の人間の能力を超えたですね、潜在能力を持って生まれてくるという、この生物学的事実がですね、いかに若者がこの年配者から見下げられようともね、必ずやその若者たちは、常に親たちの、大人たちの時代を超えて、より素晴らしい時代をつくってきた。これが歴史的事実であります。その意味でですね、この人間が生まれてくるのは常に新しい時代をつくるためだ。歴史をつくるためだ。ということがですね、歴史によって実証されておりますから、だからこのことをまずは言わなければならない。そして、新しい時代をつくろうと思ったら、何が大事なのか。**

**それは、われわれと同じことを考えておったらいかん。われわれ、もっと素晴らしい理想を持たなければならない。われわれが持っていないような、われわれをあっと驚かせるような、そういうこの理想や夢や希望というものをですね、つくり出さなければならない。だけど、それは必ずできるんですね。**

**なぜかといったら、この新しく生まれてくる子どもたちは、未来からの使者だ。われわれが今、生きておる時代より、もっと先の可能性を持ってですね、確実に生まれてきているわけであります。われわれよりも、より素晴らしい能力を潜在的に持って生まれてきてるということは、新しく生まれてくる子どもたちは確実に未来からの使者だ。その意味でですね、この人間が生まれてくるのは常に新しい時代をつくるためだ。歴史をつくるためだといわなければならない。歴史をつくろうと思ったならば、われわれはどういうふうにこの現実を変えていくのかというね、そういうこの理想という、そういうものをわれわれは持たなければならない。そして、その理想を実現するために、今を生きるというね、そういう生き方をしなければならない。まあ、そのことによって、じゃあ、われわれは何をして、自分は、自分自身は何をして新しい時代をつくったらよいのか。自分は何をして歴史をつくればよいのか。当然そのことが課題になってくる。そこからこの自分がやるべき仕事、自分がなすべき使命、自分の生き切る理想、志というものがですね、必然的に、まあ、要求されてくるわけですね。その意味で、まずこの人間が生まれてくるのは歴史をつくるためだ。何をして自分は歴史をつくればよいのか。そのことをですね、人間として人生を生きていこうと思ったならば、われわれは必然的に考えなければならない。**

**だけども、こういうこの哲学的なですね、問題意識というものを人生において持ってないとですね、こういう自覚が目覚めないんですよね。ですから、ほとんどの方々がですね、まあ、適当にやっておったらなんとかなるんじゃないのっていう、そういうこの感じの人生を生きてしまってるんですよ。まあ、それは残念ながら、哲学的なこの物事の考え方というものを知らないし、習ってないが故にそうなってしまうんですね。で、科学的な物事の考え方をすると、その今のまま時代が進めば、30年先はこうなっちゃうねというふうなですね、そういうふうなこの感じになってくるわけですね。科学的未来予測というのは、30年先はこうなる、50年先はこうなる。じゃあ、その状態が困った状態なら、今、何をしなきゃならんかというね、そういう感じでこの科学的未来予測における人生というのは出てくるわけですけども、だけども、この30年先はこうなる、50年先はこうなるというのは、これはわれわれの意志とは無関係なですね、この歴史的なその因果列に基づく未来予測なんですね。だけども、この人間にとって必要なのは、30年先にはどういう社会にしようか。30年先にはどういう会社にしようか。30年先にはどういう家庭にしようか。30年先にはどういう世界にこのしなければならないのか。**

**歴史は常にわれわれの意志に基づいてつくられていくというね、そういう世界ですので、なるようにしかならないというようじゃ、歴史をつくるために生まれてきたという価値がない。われわれは、この自らの意志に基づいてどういう世界をつくりたいのかというね、そういうこの欲求というものを持たなければなりません。**

**そのことのためにですね、このおぎゃあと生まれ出てくる子どもたちというのは、先に存在する大人たちに反抗しながらですね、その未来をつくっていくという、そういう力を潜在的に持って生まれてくる。それが第１反抗期、第２反抗期というね、そういうこのエネルギーが命に先天的にプログラミングされておるということのですね、意味であります。子どもたちは、親や先生や大人に反抗しながらですね、俺はそう思わんと、俺はそうやないと、自分はそんなことは望まんといってですね、そして、その大人たちとは違う欲求や、大人たちとは違う考え方や、大人たちとは違う価値観をつくり出して、そして大人を超えて、より素晴らしい、新しい時代をつくっていくという仕事をするわけですね。で、そういうふうにこの大人たちがなんか言うたら、俺はそう思わんというね、それがこの両親から遺伝子をもらってきて、すでに大人たちよりも素晴らしいことを考えることができる能力を先天的に与えられて生まれてきてる。それが故にですね、大人たちがなんか言うたときに、俺はそう思わんというようなことを言うわけですね。**

**あるいは、毎年毎年、ノーベル賞をもらうようなね、研究が出てきますけども、それもみんな、みんなはそれでええと思っとるかもしらんけども、俺はなんか納得できんなと。なんかこれはおかしいんやないかな。先人たちがつくったね、学問的真理に対してもですね、なんか俺は納得できん。そういうことを言うことができるということはですね、それはなぜできるのかといったら、おぎゃあと生まれ出てくる子どもたちは、すでに前の時代の大人たちより素晴らしい能力を潜在的に持って生まれてきてるからですね。その大人たちの言うことに対して、この反論し、また納得できん、承服できん、おかしいと思う。そういうことが言える力をですね、持ってるわけですよね。そのことによって、この確実に子どもたちは歴史をつくり、新しい時代を呼び起こすというですね、そのことができてきたわけであります。だから、皆さん方も、そういう思いでですね、この時代を生きる、歴史をつくるために生きる。歴史をつくるということは、新しい事実を創造しなければならない。新しい事実をつくり出さなければならない。新しい可能性を開いていかなければならない。その能力をみんな持ってるんですよ。俺にそんな力はないと思うかもしれませんけど、それはまだ自分がですね、その今、持ってるこの理性という顕在能力に支配されてるから、そう思ってるだけであって、命に潜在する能力というものは、すでにもうわれわれの能力をはるかに超えた力をですね、諸君は持ってるんだ。その自覚をですね、ぜひ持ってもらいたいと思います。**

**とにかく、最低限度ですね、自分の親だけは超えられるんですよ、みんな。これは生物学的事実ですから。で、みんなが自分の親を超えればね、全体的にいって、今の社会より素晴らしい社会をつくれるということになるわけですよ。そのことを歴史は実証してますよ。もう古代からずっとその歴史の流れを見てくればね、確実にいろんなものがより素晴らしくなってますよ。その意味でもとにかく、われわれは歴史をつくるために生まれてきたんだ。そのことをですね、まずこの意識しなければなりません。だから、いったい俺は何をして歴史をつくろうか。どういうことにおいて、新しいものをつくり出そうか。どういうことにおいて、この進歩、発展といえるものをですね、自分はつくり出そうか。そのことをですね、考えていなければなりません。そういう意味で、この命をなんのために使おうか。この命の使いどころを何に定めようか。そういう思いを持ってですね、この人生を生きる。これが人間として人生を生きる場合のですね、基本的なこの意識、自覚でなければならないということですね。**

**で、２番目にはですね、２番目のこの命をなんのために使うかということを考えなきゃならんということの根拠は、理想のない人間は自分のない人間である。すなわちどういうことなのかといったら、とにかくよく言われることですけど、何がしたいのと言われてですね、いや、べつに大して何がしたいということはありませんと。そういうふうな感じの人が多いんですよね、現代は。だけど、したいことがなかったらどうなるかといったら、したいことがない場合には、社会においては他人に与えられたことをさせられてしまう。他人に与えられたことをさせられるのは、これは人間ではない、奴隷だ。意志のない、他人の命令によって動かされる奴隷だ。家畜だ。人間が人間として人生を生きていこうと思ったならば、最低限度、自分の肉体だけは、自分の意志と決断で動かさなければならない。でなければ、人間ではない。自分の肉体が他人の意志によって支配される。これは奴隷の人生だ。奴隷であって、家畜である。自分の思うようには動けないというね、そういうこの命令と支配で動かされてしまうという家畜である。最低限度、自分の肉体だけは自分の判断で、自分の意志と自分の決断で動かすというですね、そのことをしなければならない。他人から命令されるのを待ってるという家畜的な、奴隷的な、そういうこの生き方をしたのではですね、自分の命が泣くというか、悲しむ。本当の命の喜びというものをですね、そこでは感じられない。そこには命の自由がない。生きることも死ぬことも、あなた任せというんじゃですね、生きるために生まれてきたその命に喜びのある人生というものを与えてあげることはできない。**

**命令されるのを待ってるんじゃなくって、常に人間であるならばですね、どうすることがこの大事なのか、どうすることが素晴らしいのか、今、何をすればよいのか。それを自分で決めて、自分で判断して、そして、自分で自分の肉体に命令して、自分の肉体を動かすという生き方をしないと、本当に生きてるとは言えないし、本当に仕事をしてるとは言えないと。それは仕事をさせられてる社員であったならばね、それは仕方がないけども、だけども、社長さんが期待してるのは、自分で判断して、最高の仕事ができる人間だ。経営者なら誰でもそういう社員にみんながなってくれることを願ってるはずなんですよ。命令されればなんでもするけども、命令されなかったら、何していいかわからんというふうな、奴隷的な社員はですね、かえってこの社長さんにとっては、苦労の種だ。いちいち言わんことには動かん。言わんかったらなんにもせん。そういうことじゃですね、この本当の価値ある仕事というかですね、この会社としていろんな千変万化する現状に対応していく、そういうふうなですね、えー、仕事をする場合に能率のあるですね、その責任感のある仕事というのはできません。自分で判断して、自分で行動して、初めて責任感も生まれてくるし、またその結果というものもですね、いい状態になればうれしいと思えるだろうし、また悪い結果になったらどうしたらいいのかと考えるだろうし、そういうところから主体性がこう生まれてくるわけですよね。**

**とにかく自分の肉体だけは自分の意志と決断で動かすというね、この基本を忘れてはならない。その意味でね、自分の行動基準というものをですね、あなた任せにしないで、自分自身が自分の行動基準、自分の判断基準というものを正しく持って、そして、その俺の考えというものをですね、仕事の仕方の中でも、自分の生き方の中でも、ちゃんとこう示してもらいたい。それがこう、人間としての生き方のまた基本であります。自分の肉体が他人の意志で支配されるという状態に自分を置いてはならないと。例え命令に従う場合でもですね、俺もそう思うと思うからそうしたんだというですね、自己責任という態度を忘れてはならない。単に命令に従って動いてたら、社長さんがこうしろと言ったからやったんで、俺がそうしたいと思ってやったんじゃないと。だから、結果は社長の責任だというような、そういうことにこうなってしまって、責任逃れをし、責任転嫁をするようなですね、そういう人間が出てくる。**

**自分が行動して、自分の肉体を動かしたからには、それは俺の責任だと。結果は全部、俺が背負ってやるというですね、そういうふうな気持ちを持って仕事はしていかなければなりません。でないと、いろいろ思わざる状況というものがね、いろんなこの現場でこう生まれてきますから、そのときにいちいち命令待ちをやっておったんじゃですね、なかなか問題を解決しませんし、事は動きません。自分でこの場合はこうするべきだと思うですね、最高の判断というものを自分自身がしながらですね、その行動に自分が責任を持って生きるという、そういう生き方をしていくことによって、人間は自分自身を成長させることができるのであって、命令でいろいろ教育されてですね、成長してるというような、そういう成長の仕方というのはまだ本当のその人のこの人生を生きてるような、そういう生き方ではありません。自分で自分の肉体を動かして、そして、結果が悪ければ、自分で、さあ、どうしようかとこう考えて、責任を取りながら生きていくというところにですね、この本当の実力というものが備わった生き方ができるわけであります。**

**とにかくこの何がしたいのか、どうしたらいいのかということが自分で判断できないということは、その人は自分の人生を生きておるのではない。何がしたいのかと言われて、何がしたいのかわからないということは、自分がないということだと。だから、人間が人間として自分らしい人生を生きていこうと思ったならばですね、最低限度、この何かしら人生に目的、今を生きるためのですね、目的というものがあって、初めてわれわれは自分の人生というものを生きることができる。目的のない人間は自分のない人間である。目的のない人間は自分を見失った人間である。目的のない人間は、理想のない人間は、自分の人生というものがない人間である。であるが故に、われわれは人間として生きていこうと思ったならば、この命をなんのために使うか。それを自分で決めなければならない。命の使いどころというのは、自分で決めて、そして、自分で責任を持って生きていくというですね、そういうふうな生き方をしなければなりません。**

**で、第３番目のこの命をなんのために使うかということを考えなきゃいかんという根拠はですね、これは永遠の生命と個体的生命との関係性ということから出てくるわけですね。で、われわれは肉体を持って生きておる、いわゆる個体的生命であります。だから、おいくつですかと言われたらですね、この何十歳ですとこう答えるのが当然なんですけども、だけども、この個体的生命の中に息づいておる命そのものはですね、もうすでにこの地球上で38億年間も生き続けてきた命なんですね。で、われわれの本体である永遠の生命というものは、もうこの地球上で38億年間も生きてきた。だから、われわれの生命年齢というのはですね、みんな同じ、みんな同い年で、38億歳なんですよね。これは１億年単位でいった年齢ですからね、だから、10歳、20歳や30歳、40歳、50歳、100歳ぐらい違ったって、こんなものの数じゃないというね、そういうこのレベルの判断基準ですけども、とくかくは、このみんな38億年間、もうすでに生きてきたんですよね。38億年間、生きてきた命しか人間にはなれなかった。人間という形を持って、今、ここに生きてるということは、それは何を証明してるのかといったら、もうこの地球上で38億年間もずっと生き続けてきたということをですね、その人は証明してる。**

**だから、皆さん方は、もうすでに38億歳なんですよ。もうどんな年やと。もうおじん、おばんどころの話じゃない。化石どころの話じゃない。本当にもう、なんちゅうか、本中華、冷やし中華の世界でですね、なんとも言いようがなく、もう古い。だけど、古いけど新しいんですもんね。38億年、生きてきたんだけど、その38億年の中の、今、最先端、最もこの新しい時代を、今、われわれは背負って生きてるわけですよね。だけど、この38億年間、生きてきたというこのわれわれの、今、持ってるこの命というのは、どういう形で38億年間、生きてきたのかといったらですね、その各時代を担って生きてくれた祖先たちがいると。で、自分の命をこの現在にもたらすために、自分に至るまでの各段階を生きてくれたその命たちが、あらゆる戦いに勝ち続けて、あらゆる困難、悩み、苦しみを乗り越え続けてくれたが故にですね、今、自分はここに生きておるのであって、過去の命の、ただ一つの命でもね、戦いに負けておったならば、もう自分は今、ここにはおれないということですよね。また過去の自分の祖先たちの誰かがですね、苦しみ負けて、そして、その悩み打ちひしがれて、自ら命を絶って自殺をしてしまったということであったならば、もう自分はここにおれないという、そういうことです。そういうことも一回もなくってですね、そのわれわれの祖先たちは、自分の祖先たちは、一回も38億年間も、一回も戦いに負けることがなかった。また自分の祖先の誰一人として、誰もこの苦しみや悩みや悲しみに打ちひしがれることなく、それを乗り越え続けて生きてきた。それが故に、今、われわれはここにおれるんだっちゅうことですね。**

**その過去を考えるならばね、そんなにまでして、この自分の命をこの世にあらしめるために過去の祖先たちは努力してくれたが故に、今、自分はここにおれるんだという、この命のありがたさを考えるならば、この命の不思議を考えるならば、俺たちも、俺もやっぱり、その過去の、その祖先たちの努力に報いるためにしっかり生きないかんなという、そういうこの思いが湧き上がってくるはずなんですよね。大事なのは、われわれは永遠の生命なんです。その永遠の生命の中の、せいぜい100年という、この短い期間をですね、預かって、今、われわれは生きてるわけです。そういうところから、この必然的に自分の命の中には永遠の生命と個体的生命、せいぜい100年生きるこの個体的生命と、永遠に存在する生命との関係性というものが、われわれのこの一個の命の中に存在するわけですね。そして、われわれは、永遠の命を喜ばせるような生き方をしたとき、幸せになれる。永遠の生命を喜ばせるような生き方をしたとき、われわれは成功と人生を獲得できる。もうそういう関係性になってるわけですよ。幸せだなと思う瞬間というのは、永遠の生命が喜んでるんですよ。命そのものが喜んでるんですよ。で、その命そのものを喜ばせるような生き方をわれわれはしなければならない。そのことによって、自分も幸せになれる。**

**そして、生命というのはですね、ただ生きてるだけではない。命の歴史を見れば、そこに進化というプロセスがある。生命が進化してきたのは、いわゆる今の自分が人間としてここにおれるのは、自分に至る過去の個体的命たちが、あらゆる困難、苦しみに負けず、あらゆる戦いを勝ち続けてですね、命を進化させるための、そういうこの生き方をしてきてくれたが故に、われわれは人間としてここにおれるわけだと。であるが故に、われわれも命を進化させるような、そういう生き方をしなければならない。でなければ、祖先たちの努力に報いることはできない。恥ずかしいと思わなければならないと。じゃあ、命を進化させるための生き方とはなんなのか。そのことを考えることによってですね、この命をなんのために使えばよいのか。今、この時代をですね、どういうこの生き方をするならば、われわれは命を進化させるというですね、そういうこの生き方に与するというか、そういう生き方になっていくことができるのか。どういう生き方をするならば、永遠の生命を進化させる、命を喜ばせるというね、そういうこの生き方ができるのか。そのことをわれわれは一人一人、考えなければなりません。**

**とにかく、われわれは永遠の生命、われわれ、俺、自分と言ってるのはね、せいぜい100年生き切る、この自分ではない。われわれみんな、永遠の生命を命に宿してるんですよ。それはみんな38億年間、生きてきたんですから、38億年間、生きてきたと、この事実は永遠の生命を意味しておるわけですよ。だけど、自分自身はその38億年間の中の最先端の100年というものを受け持って、さらにこの永遠の生命を永遠の生命として先に手渡していかなければならないというね、そういうこの責任がある。それは単に子どもを生むというだけではなくてですね、その人類がより素晴らしい生き方ができる、より素晴らしい未来をつくる。人類が歴史をつくっていくっちゅうことのためにですね、われわれは協力して生きるということをしなければならない。それが永遠の生命に関わりながら、自分の人生を生きるということのですね、道筋であります。例え自分の子どもがなくっても、とにかくは、永遠の生命を進化させるために生きる。命に協力して生きる。命をより素晴らしい命にするために生きる。それが人生であります。そのために、われわれは文化をつくり、また様々なですね、より素晴らしいものを開発し、また住宅をも、より素晴らしい住宅にしというような、そういう活動をしてるわけですね。**

**確かにこの住宅の歴史というものを見ればね、そこには明らかに人類のこの命懸けの努力の結実が見えてくるわけであります。そういう生き方をすることが人間として生きることなんですよ。今のこの住宅がどんなに素晴らしくっても、これが終わりということはない。これでいいということはない。もっともっと素晴らしい住宅というものをですね、考えることができる。また、もっともっと素晴らしい、新しい時代に対応する家の姿というものをですね、われわれ、つくっていかなければならない。それが新しい事実を創造するという、歴史をつくるという仕事なんだ。まだわれわれはですね、その命に宿しておる潜在能力の約１割強しか使っていない。まだまだ住宅なんかでもですね、今、われわれが目にしておる住宅というのは、まだまだレベルの低いものです。まだまだ９割弱もですね、あらゆるものがより素晴らしくなっていく可能性というものを、われわれは命に宿しております。これが脳生理学という観点からですね、人間の潜在能力というものを見た場合の今の考え方です。**

**今、われわれがやっておる仕事、今、われわれがつくり出した、この文明、文化というものは、まだ人類の能力の約１割ちょっとしか使っていない。まだ９割以上もですね、潜在する能力が残っておる。まだまだ、あらゆるものは素晴らしくなるんだ。であるが故に、われわれはより素晴らしい事実を、より素晴らしい歴史を、より素晴らしい未来を創造するために生きなければならない。そして、確実にわれわれは、われわれの親よりも素晴らしい能力を与えられて生まれてきてるのである。であるが故に、われわれは時代を超えて、大人たちの時代を超えて、もっともっと素晴らしい何かを創造していくというね、そういう生き方をする必要があります。そのこと自体が、自分を幸せにすることなんだ。自分が新しい時代をつくる仕事をするっちゅうことは、自分が幸せになる、自分が成功の人生を歩むことなんだ。それは同時に、永遠の生命を喜ばせ、自分の幸せを実現し、自分の人生の成功を実現し、そして新しい時代をつくるという、そういうこの生き方になっていくわけですね。**

**とにかくもっともっと、この若者は大人に反抗しなければなりません。大人がなんか言った場合に、俺はそう思わんと言えるぐらいの力を出さなければならない。本当は言えるんですよ、みんな。可能性としては、みんなその力を持ってるんですよ。われわれの能力を超えながら、新しい時代をつくるということのために生まれてきてますから、みんな今の時代の大人たちより素晴らしい能力を潜在的に与えられて生まれてきてます。だから、もっともっと大人に反抗しなければならない。俺はそう思わん。俺は納得できん。俺はおかしいと思う。堂々とそれを言わなければならない。そういうふうに若者が言ったときに、年長者はどういう対応をせないかんのかといったらならば、決してそれを否定してはならない。反抗してきたならば、おまえ、そんなことを考えてんのか。まずはすごいなと、こう言ってあげなければならない。だけども、まだ若者の考えは荒削りで、まだ質においてはですね、低いレベルの質しか持っていない。であるが故に、その若者の考え方を変えさせようとしないで、また大人たちの考え方に引きずり込もうとしないで、その若者の考え方をその考え方のままで伸ばしてあげる。そして、その考え方で立派に社会を生き、新しい時代を創造することができるような、そういう力に成長させてあげる。そのために協力するのがね、われわれの年代の役割であります。**

**それがいわゆる教育という、この活動になるわけですね。社員教育においても、また学校教育においても、これは共通する理念です。すなわち教育というのは、Education、Educateすることである。Educateするっちゅうて、どういうことなのかといったら、そのEducateという言葉をラテン語の語源に戻せばね、エドクタム、エドクタスという言葉になる。エというのは外へ、ドクタムというのは引っ張り出す。すなわち教育するということは、その人の持っておる潜在する能力を外に引っ張り出してあげて、そして、その子を教えておる人を乗り越えていくことができるような生き方ができる。そういう人物にしてあげる。それがEducateする、教育するということの本義であります。それができなければ、社員教育ということの意味がない。教育の理想を言うならばですね、上に立つ者は自分を超える部下をつくる。それが教育の理想であります。これは生物学的にいってそうしなければならない。なぜならば、生まれて出てくる子どもたちは、確実に親を超えて生まれてくるんだ。であるが故に、親以上の子どもをつくらなかったならば、その教育は失敗だといわなければならない。これは歴史的事実です。また生物学的根拠を持った教育に対する考え方です。**

**自分の命令を聞くような人間をつくってはならない。自分の言うことに反抗してきて、自分よりもっと素晴らしいことができる。そういうこの後継者をつくることがですね、この大人たちの理想であります。そういう思いで大人たちは若者に対さなければならない。決して逆らってくることを嫌ってはならない。逆らってきたときには、耳を傾けて、それは未来からの声だ。まあ、その子は、今の大人たちに未来を教えてくれてるんだ。そういうふうな意識でね、若者の言葉に耳を傾けるという、まあ、そういう態度をもって教育は行われなければなりません。反抗することによってしか、自分は形成できません。反抗しないような、起伏のない、そういう社員をつくっては、会社は滅びます。もっと素晴らしいことを考える。そういう社員をどんどん、どんどん、つくり出すという意欲でですね、その上に立つ者は部下に対さなければならない。**

**今、父権の失墜っちゅうことがですね、よく言われておりますけども、母性の衰退と同時にね、父権の失墜っちゅうこともいわれておると。いわゆる父性とはなんなのか。父親とはなんなのか。父親というのは、自分の子どもに対して、俺にぶつかってこいと。どっからぶつかってきてもちゃんと受け止めてやるぞ。心配せんとぶつかってこい。最後は俺を超えるんだといってですね、育てるのが父性なんですよね。だけども、残念ながら、今の社会はお父さんもお母さんも従順で素直な子だけを求めて、反抗する子は喜ばない。反抗する子は悪い子や。学校に行っても、素直な子はいい子で、反抗する子は悪い子や。そういうふうなですね、従順さと素直さだけを要求するような、そういう社会構造というものを理性がつくってしまいました。理性というのは、みんなを画一化する。自分に反抗する者を許さないというのが理性ですからね。理性社会はそういう結果をつくってしまったんですよ。反抗できない子をつくってしまったんですよ。だけど、それは人類の歴史にとっては不幸なことだ。人間は反抗しなければ、他人が言ったことに対して、俺はなんかそうは思わんなというんで、自分ができてくるんですよね。俺の考えというのはね、べつになんもせんと湧いてくるもんやない。俺の考えというのは、誰かの言ったことに対して、俺は違うというふうなね、そういうふうなこのことを自分が感じることによってですね、自分の考えというのは、だんだんとこう形成されてくるのであって、この反抗するというそういうことなしにはですね、自分の考えというようなものはなかなかこうできてこないんですよね。**

**であるが故に、この人間の命にはですね、第１反抗期、第２反抗期というね、そういう反抗するという、そういうこの力がですね、命には宿っておるわけであります。それは自分を確立するため、自分をつくるために、そういうこの道筋が、生まれながらに命にプログラムされてるわけですよね。もっともっと、この若い人たちはですね、反抗する、自分を素直に表現するということに、もっともっと、恐れないでね、自分を素直にぶつけていくというですね、そういうことをするべきだ。だけど、人間なんだからね、むやみに粗暴な行動をすることは、これは人間としては、人間の格のあることとは言えませんから、ある程度、理性的なですね、判断はしなきゃなりませんけども、だけども、人間関係を、この壊さないような仕方でね、自分の考えというものをぶつけていくという努力だけは、これは惜しんではなりません。**

**自分がこんなことを言うたら、ばかにされるやろうな。こんなことを言うたら、叱られるやろうなと思って言わないということは、残念ながら、自分を自分で卑しめてることですからね。もっともっと自分自身というものを積極的に出して、そして、それに対してまた批判されたり、たたかれたりしながらも、自分の考えというのをどんどん、どんどん、成長させていくというふうなですね、そういう意欲を人間は持つべきであります。上に立つ者は反抗を恐れてはならないけども、下に立つ者は、また叱られることを恐れてはならない。叱られながら、自分は成長していくんだというね、そういうこの教育的な関係性というものをですね、忘れてはならない。叱るとか、怒るのは、ものすごくね、エネルギーがいるんですよね。だから、できることならば、そんなエネルギーを使うようなことはあんまりしたくないので、どうしてもなあなあでね、あんまり怒らんと、その、まあまあっちゅうて、こう済んでしまうのが、平凡な社会のあり方ですけども、それをこの気力を振り絞ってですね、カアッとなって怒るというのは、これも一種のまあ、自分を犠牲にした愛の行動なんですよね。叱ってもらってるというね、それほどの努力がですね、この怒ってるほうにはあるんだっちゅうことも、叱られながらもわかってないといかん。ただむかついて、感情的に怒ってるのは違うと。やっぱり教育的配慮を持ってね、もっとこの素晴らしい仕事の仕方をし、もっと素晴らしい品格のある人間として、この成長してもらいたいというね、そういうこの意識を持って、怒るときには怒ってるというね、そういうことをするもんですから、だから、ぜひそういうことも意識しながら、怒られる側は怒ってもらってるというね、そういう気持ちも持ってもらったほうがいい。**

**とにかく、新しく生まれ出てくる人間は、常に大人を超える可能性というものを内にはらんでですね、生まれてきてるのであって、その意味で、大人たちの言うことに常にこの服従するんじゃなくって、それに対して自分をさらけ出しながらですね、反抗しながら自分を成長させていく。叱られながら自分を成長させていく。そういう生き方をですね、ぜひものにしてもらいたいと思います。そのことによって、本当に強い自分というのができますからね。最後は、俺はあいつを乗り越えたるんやと思わないかん。親を乗り越え、先生を乗り越え、大人たちを乗り越え、社長を乗り越え、もっとすごい人間になったる。もっとすごい会社をつくったる。もっと素晴らしい仕事をしたる。そういう思いでね、生きていかなければならない。それが新しい時代をつくるために生まれてきた人間としての心意気であります。これは単に理想論で言ってるんじゃない。生物学的事実なんだ。また歴史的事実なんだ。生物学的事実によって証明されたことなんだ。また歴史がそれを証明してるんだ。ばかにされ続けた若い者は、必ず親を超えて、素晴らしい歴史をつくってきたんだ。これは事実だ。誰も否定できない。**

**諸君はもっともっと自分をさらけ出しながらね、上司を超えていくというね、そういうこのもっともっと素晴らしい仕事をし、もっともっと素晴らしい能力をこの発揮し、もっともっと素晴らしい人間性に成長していく。そのことを常に目指しておることが、永遠の生命に関わる、非常に大事なですね、生き方の原理であります。永遠の生命は進化することを望んでるんだ。永遠の生命とは本当の俺だ。俺が成長することを望んでるんだ。命は成長することを望んでるんだ。だから、100年生きるこの間に成長しなければならない。そういう意味でですね、この命の使いどころを何に定めるか。何に焦点を当てて、俺はこの時代を、この時代に生まれてきた人間として、この時代に生まれてきた意味を自覚しながらどう生きるかというね、そのことをわれわれは考えていく必要がある。これがこの命をなんのために使うかということを考えながら生きることが、人間として生きるということの根本命題、根本の課題だということのですね、意味であります。**

**それじゃ、具体的にですね、具体的にどうすれば、この志や、理想や、夢や、希望や、理念や、目的、目標というものが持てるのか。どうすれば、志に生きる、理想を持って生きる、命を燃やして生きるっちゅうことがどうしたらできるのか。そのことを次に具体的に考えていかなければならない。この永遠の生命という、この命を燃やしてですね、本当に燃えて生きるという、そういう生き方をするためには３つの原理があります。まず第１番目はですね、この苦難を引き受けて立ち上がるという、この生き方を覚えなければならない。これはどういうことなのかといったらですね、今、何かしら、人類は大きなこの悩みを持ち、苦しみを持ち、問題を持って生きてる。何かしら大きな問題が乗り越えられないでね、人類が苦しんでるとするならば、それを他人ごととして見てるんじゃなくて、俺がなんとかしたろうやないか。世界の人類がそれほどに苦しんでるんだったら、俺がその課題を引き受けてですね、なんとかしたろうやないかという、そういう意気込みでですね、その人類の上に降り掛かる苦難を引き受けて立つという、そういう生き方で、そういう仕方で自分の生きる目標、志というものをつかみ取るというね、そういう人生もあるわけであります。**

**あるいは、この世界が何かしら大きな問題で苦しんでおるとするならば、今は戦争という問題がね、非常に大きな問題として世界を悩ましておりますけども、パレスチナ人とイスラエル人のどこまで続くかわからん、あの不毛な戦争もね、他人ごとにこう見てしまうんじゃなくってですね、俺がなんか、その問題に対して答えを出して、あの両方を協力し合いながら助け合って生きるという関係性に導いてやろうやないか。そういう思いを持ってですね、立ち上がるという青年も、必ずやこれは出てくるわけです。で、感性論哲学の歴史観からするならばね、あのイスラエルとパレスチナの、あの不毛な戦争に最終的な答えを出して、そして、彼らを融和させていくという力を持っておる者は日本民族しかない。いわゆるわれわれの祖先から、あの戦争に終止符を打つ人間が必ずや出てくるというのがですね、感性論哲学の信念であります。日本民族は平和の名士として立ち上がって、世界に貢献しなければならないというね、そういう民族としてのこれからの使命に目覚めるならばね、必ずや、あの戦争に終止符を打って、彼らを協力関係に導いていくという人物がですね、われわれの祖先から出てこないはずはない。これは確実なる歴史の要請ですからね。必ずやその思いを持って立ち上がる人間が日本人から出てくる。そのことを私は確信しております。そういうふうな意味でね、世界が何かしら大きな悩みを持って苦しんでおるとするならば、俺がなんとかしたろうやないか。そういう意欲を持って立ち上がってくる人間もおるかもしらん。**

**また国難ですね。国に何かしら大きな災いが外国から掛けられてきたならばですね、その国難に対して立ち上がる。まあ、これは明治維新がそうでしたけども、とにかくは、このまま放っておいたら、日本は奴隷というか、属国化してしまってですね、植民地にされてしまって、大変なことになってしまう。国が滅びる。このまま黙って見とるわけにはいかんというんでですね、この10代後半から20代の青年たちは立ち上がって、そして、幕府には任しておけへんと。俺たちがなんとかせんことには、自分が守れないだけじゃなくって、家族を守れない。愛する人を守れない。民族を守れない。なんとかしようというんで、日本中からそういう思いを持った青年たちが立ち上がって、明治維新という革命を起こしたんですよね。そういうふうにして、自分の生きる目標、生き方というものをですね、求めていくこともできるわけであります。国難に向かって立ち上がる。あるいは、社会が何かしら大きな問題を抱えておったりするならば、俺がなんとかしたろうやないか。また業界において何かしら大きな問題があったならば、その業界の問題に対して、俺がなんとかしたろうやないか。家族がなんらかの問題で苦しんでおるとするならば、俺がそれを解決して乗り越えて、家族を幸せにしよう。そういうふうなね、思いで立ち上がる人もいる。**

**とにかく、この自分を包み込む、より大きな世界というものをですね、問題にして、そして、この人生に降り掛かる、人生に降り掛かるさまざまな苦難というものをですね、その単なる苦しみと考えないで、苦難こそまさに自分に使命を与える現象だというね、そういうこの受け止め方をして、そして、その苦難こそ、まさにこの天の、宇宙の、神仏の自分に対する呼び掛けだと。そういうこの苦難こそまさに自分自身に使命を与えてくれる現象だ。こういう仕事をし、こういう問題を解決してくれるやつは誰かおらんかというね、天の叫びに対して立ち上がっていくというね、これがこの苦難というものを使命として自覚して、自分の人生を考えていくという人間の生き方であります。これは感性論哲学の言葉で言うと、降り掛かる苦難の道に使命ありといってですね、その歴史的な問題、世界的な問題、人類的な問題、社会的な問題、業界の問題、また社会の問題、家族の問題。そういうこの問題をですね、俺は関係ないわって、見て見ぬふりをするんじゃなくって、放っとけへんと。これは放っとけへんと。なんとかせんないかん。そういう思いで立ち上がってですね、そして、そこに自分の命の使いどころというものを定めていく。そこに、まあ、使命感のある人生というのが、こう始まるわけですね。**

**で、実際問題、歴史を見れば、そういう生き方をした人間もたくさんおるわけであります。降り掛かる苦難の道に使命あり。苦難こそまさに、自分に命の使いどころ、生きる目的をですね、教えてくれる現象だ。そういうふうに思わなければならない。だいたいその問題とか、苦しみとか、悩みというのはですね、決して人間を苦しめるために出てくるんじゃない。苦しみ、問題、悩みというのは、常に人間を成長させるために、会社を発展させるために、社会を進化させるために、問題は出てくるわけですね。問題を避けて通ろうとしたら、会社は発展しない、つぶれる。これは三菱自動車が証明した、最も新しい教訓であります。問題を避けて通ろうとしたら、会社は発展しない。発展しないどころかつぶれてしまう。問題は常に会社を発展させるために出てくる。問題は常に人間を成長させるために出てくる。問題は常に社会を発展させるために出てくる。問題は決して人間を苦しめるために出てくるんじゃないんだ。苦しいっちゅうことは、感性は苦しいと感じますけど、苦しいっちゅうことは、感性が理性になんとかしろよと命令してるんですよね。だから、なんとかせんないかん。**

**だけど、今、自分の持っている力ではなんともならん。だけど、なんとかせんないかん。このままで放っておくわけにはいかん。なんとかしようと思って頑張ってる。そうするとですね、今、自分の持ってる力ではなんともならん。だけど、なんとかしようと思ってると、命に潜在する能力が出てくるわけですね。この命に潜在する能力が出てきたときに、それこそまさに本当の俺の力だ。われわれが学校で勉強してね、学校で勉強して、今、自分がその持ってる知識や技術、これは他人がつくったものですよ。あるいは、学校で勉強することは、全部、他人がつくった知識とね、他人がつくった技術をね、勉強して、学習して、そして、自分のものにしてる。これはパクリの人生やと。パクリや。本当の俺の力やない。借り物や。本当の俺の力というのは、借り物の学習して学んだことは役に立たん。だけど、なんとかせんないかん。そうやって頑張ってると、自分の命から底力が湧いてくる、知恵が湧いてくる、潜在能力が出てくる。それこそまさに本当の俺の力だ。俺の命から湧いてきたんだから、俺の力だ。誰のものでもない。そっから本当の自分の人生が始まるわけですね。**

**残念ながらね、学校で学んだことはパクリ、他人のまねしてるだけにすぎない。だから、学力なんていうのはね、ほとんどね、あまりこの人生においては大きな意味を持ちません。これは全然、意味がないっちゅうたら、これはうそになりますけどね、それも大事なもんですけどね、だけど、学力としてわれわれが学習したものは過去のものだ。新しい未来に対応できるもんじゃない。新しい未来に対応しようと思ったならば、知恵が必要だ。命から湧いてくる力がなかったならば、未来から与えられたね、潜在能力というのがなかったならば、未来には対応できません。先ほども申し上げたように、新しく生まれてくる子どもたちは、われわれを超えてるんだ。彼らは未来からの力を預かって、そして生まれてくるんだ。そのことによって、子どもたちは確実にわれわれを超えていくんだ。その命に宿して生まれてきた力こそ、その子の能力、その子の力ですよ。それが出てきて初めて、その子の人生が始まるんだ。学校で勉強したことは過去のことを習ってる。それは他人のもんだ。本当のその子の力ではない。**

**一生パクリでええんかということですね。パクリの人生でやっとったらいかん。借り物や、それは。他人のものやと。本当の自分ではない。今、自分の持ってる力でなんともならん。そうなったときが、本当の苦しみ、悩みが出てくるわけですよね。今、自分の持ってる力でなんともならん。そやけど、なんとかせんないかん。このまま放っておけへん。そこでこの知恵が湧いてくる、潜在能力が湧いてくる、底力が湧いてくるという、そういう状態になってね、われわれは歴史をつくるという大きな仕事が成り立つわけであります。学校で勉強したことを知ってるだけでは、これは保守的であって、新しい時代なんてつくる人間になれるはずがない。結果としてどんなに勉強して東大を出ようともね、それは決してその人本来の力を発揮して生きた人生ではなかった。だから、そう大したこれは問題じゃないんだ。だから、実際問題、小学校すら出てなくってもね、松下幸之助や本田宗一郎やエジソンさんや鉄鋼のカーネギーやね、そういう人物が出てくるわけですよ。学校で学んだことなんてものではない。命から湧いてくるうものが出てきたときこそね、そのときこそ、この本当の力といえるわけですよね。だから、過去にない、素晴らしいこのことができるというね、まあ、そういうこの力を持つわけだ。**

**松下幸之助も本田宗一郎もみんなこの学習して学んだ知識に頼らずに、自分の命から湧いてくる、この力に人生を懸けた人物たちなんですよ。そのとき初めて、新しい何かをすることができるというね、人生になるわけであって、学校で学んだことは過去の知識だからね、そういう人は保守的なことしかできません。古い知識では新しい時代には対応できませんから、歴史はつくれません。どんだけ東大、出ておってもね、歴史はつくれません。官僚というのは確かにすごい能力を持ってるといわれますけど、だけど、彼らたちは決まったことに従順になってですね、そして、その法律に従って行動するという、そういうことしかできないのが官僚であります。制度からいって、新しい法律をつくるのは立法機関である国会なんですよ。官僚は立法機関である国会でできた法律を順守するのがね、官僚の仕事なんですよ。それが東大を出た人が、このできる仕事なんだ。いわゆる古いものを学習して、そして、その範囲内で何かをしていくっちゅうことは、これはもう勉強して、偏差値が優れておってね、学習する能力が優れた人間はそれができます。だけど、そういう人間は新しい時代をつくるような仕事は絶対できません。新しい時代をつくるためには、命から湧いてくる潜在能力、命から湧いてくる知恵がなかったならば、新しい時代をつくる、新しい事実を創造する、そういうことはできません。だけど、今の政治は官僚政治だからね、政治家が官僚に支配されてる政治だから、だから、閉塞感、先が見えないというね、そういう希望のない時代になってしまったわけであります。**

**だから、勉強できないからって、そんなことぐらいはなんの弱みでもない。とにかく、みんなとにかくはね、顔が違うっちゅうことは、俺にはほかの人間のできない何かができるんだ。俺にしかできんことがある。顔が違うっちゅうことは、俺が世界一になる分野があるんだ。そういうことですからね、学校で勉強した、他人がつくったものを学習するような、そういうものなんかには、この関係ないような素晴らしい力をね、みんな一人一人、持って生まれてきてるんですよね。だから、学歴がないからといって諦めたらいかん。また学歴があるからといって威張っとったらいかん。大事なのは、学校で学んだことが役に立たなくなったときこそ、そっからその人の人生が始まるんだ。そっから本当の自分の底力を出してですね、新しい時代をつくっていくという仕事が始まるんだ。そっから俺の人生、そっから俺の仕事だ。そういうね、この生き方というものをぜひ覚えてもらいたい。そのために与えられたことをするだけで満足しておったらいかん。この命をなんのために使うか。自分の命の使いどころを自分でつかみ取って、そして、多くの課題に立ち向かっていく。そういうですね、命の燃える、すごみのある人生というものをですね、ぜひ生きてもらいたい。みんなその力を持って生まれてきてますから、やろうと思ったらできるんですよ。やろうと思うか、やろうと思わんかだけの話なんだ。とにかくこの自分の命の使いどころというものを定める第１番目の方法は、降り掛かる苦難の道に使命あり。苦難こそまさに自分に課題、問題、テーマをね、与えてくれてる。この天の呼び掛けに応えて立ち上がろうやないか。そういう人生もね、ぜひ考えてみてもらいたい。**

**で、２番目のこの志のつくり方、理性のつくり方、これは、今まで話してきたことの中にあるわけですけども、歴史観に基づいて使命をつかむ。これは今、日本の真上に世界文明の中心があるんだと。アメリカはもうすでに歴史の舞台から去ろうとしておるね、そういう国家であって、これまでは確かにアメリカが世界から憧れられる国家だった。だけど、いまやアメリカは世界から避難される国家である。もう役割を終えてしまったんだ。これからアジアが燃える。アジアの入り口は日本だ。今、日本の真上に世界文明の中心があるんだ。中国やインドはまだまだ先の話だ。今すぐに世界の指導者として、その任を果たし得るのは日本人だけだ。そして、今、時代は近代から次の新しい時代へと向かう第３の過渡期にある。日本人は人類史上、第３の過渡期を担ってですね、人類のため、世界のために立ち上がり、活躍しなければならない、かときっちゃんであると。このかときっちゃんとしての使命をですね、どこまでしっかりと、根拠のあるものとしてね、自分がつかみ取るか。そこから、この日本の真上に世界文明の中心があるという、このときに、この日本に生まれてきたというね、この幸運をどう生かして自分の命を輝かせようかというね、ことを考えないといかん。今、日本人であることが最高の幸せなんですよ。世界で一番幸せな民族は日本人なんですよ。今、世界の中で日本人以上に幸せな民族はないんですよ。まあ、よく世界からは、平和ぼけとかね、言われてますけども、平和ぼけできるほど幸せな状況にあるわけですよね。**

**経済的にもあまり苦しみはない。いろんな面で守られて安全だ。だけども、そういうこの恵まれた状況に漫然と酔っておってはならないと。今こそ、われわれ立ち上がって、アメリカに代わって世界の指導者として、全人類を、全世界を、より素晴らしい未来へと導いていく。そういう役割をですね、果たそうという思いに燃えて立ち上がらなければならない。われわれは日本を世界一素晴らしい国にしなければならない。なんて素晴らしい国なんだといって、全人類を感動させなければならない。これから日本人は、全国民がですね、日本を世界一素晴らしい国にするために団結して立ち上がらなければならない。そういう目標を持って生きることがですね、今、この時代に、日本という国に生まれてきた人間の使命であります。世界一素晴らしい国をつくろうじゃないか。日本を世界一素晴らしい国にしようじゃないか。ぜひそういう思いでね、若者が中心になって立ち上がって、そして、大人たちを巻き込んで、日本の新しい時代を開いてもらいたい。やろうと思ったらね、それをする力をみんな持って生まれてきてますからね、できるんですよ。そういう思いになるかどうかだけの話なんです、これはもう。**

**そして、今、日本の真上に世界文明の中心があるということは、日本人があらゆる職業領域において、世界の頂点に立つときがきたんだということですね。日本人があらゆる職業において、世界の頂点を極める。全世界は日本を目標にやってくる。だから、個人的に言ってもですね、今、自分がやっておるその仕事で俺は世界の頂点に立ったるんやと。世界の同業者は俺を目標にやってくるんや。まあ、そういうふうなですね、時代になるんですよ。なるっちゅったって、漫然と待っておったんじゃなりませんから、なるということは、せないかんのですけどね、せないかんのやけど、なるんですよ。もうそうせざるを得ないような状況に日本人は追い込まれるんですよ。その努力が、生きるために要請されるような時代になってくるんですよ。そういう覚悟で、そういう思いで生きないとやっていけないような状況になる。もうすでにそういう状況になってるんですよ。これが、歴史観というものを背景にしてですね、自分の生きる目標、使命をつかむという、そういう方法なんですね。**

**すでに21世紀、日本の使命というのは、皆さん方に聞いていただいた話の中でもう出てきているわけですけども、これから日本人は、アメリカに代わって世界の指導者となる。あらゆる領域において世界の頂点に立たなければならない。そのためにまず何をせないかんのか。そのために何をせないかんのか。そのために、まず最初にやらんといかんことは、東京から都をどっかに移すことだ。大遷都というね、この新都造営の夢に生きる。これがこの日本に新しい時代をつくり出す出発点だ。まず全国民がこの希望に燃えてですね、生き始めなければならない。どこに都を移そうかな。まあ、誰が考えてもわくわくすることですからね、どこがええやろうなっちゅうことはね。だいたいそのものを買うのでも、何を買おうかなと思ってるときが一番うれしいときですからね。買ってしまったら、もうそれで終わりなんですから。いろいろあるけど、この中から何を選ぼうかなと思ってるときが一番楽しいですよね。これにしようかな、あれにしようかなと思ってるときがね。そういうふうにして、命は燃え立ってくるんですよ。**

**なんで都を移さないかんのか。それは国に新しい時代を呼び起こそうと思ったらね、まず遷都から始まる。これは歴史の教訓だ。日本の古代は、今の奈良県の大和地方だった。そこから平安時代になるそのときに、京都に遷都した。そして、武士の社会になって、鎌倉が政治の中心になった。だけど、鎌倉というところは、狭いところだから、あっという間に終わってしまってね、で、もう１度、足利尊氏が京都に都を持っていった。だから、京都はもうすでに中世の時代にね、平安時代にその風土の持っておる潜在能力を全部出し切ってしまったところだ。だからもう日本を、国家を発展させる余力がない。だから、２回目に京都に都を持っていったときに、日本は麻のごとく乱れ、戦国時代になっちゃったんですね。そして、その秀吉によって家康が関東に移封される。関東平野が政治の中心になって、ようやくね、新しい日本の近代が始まった。そして、もう去年で東京に都が行ってから、江戸に都が行ってから400年だ。もういかに広い関東平野といえどもね、その風土の持ってる余命は尽きた。もう東京は近代日本を支えた都としての価値を、文化的価値を保存しなければならない時代に入ったんだ。もう再開発を続けて、過去を葬り去るというかですね、その過去の文化遺産を壊してしまうようなね、そういうことをやっておったらいかんと。東京もすでに近代を支えた都としての価値を保存する段階に入った。**

**さあ、どこにこれから日本の都を移そうかね。全国民がそれを考え始めたらね、本当に国論が沸き立ってね、それだけでも国家を活性化しますよ。新しい都をつくるっちゅうことは、もう国家的大事業ですからね。日本に新しい時代が始まる。まさにそういう雰囲気ですよ。で、本当にそうなるんですから。世界歴史を見てもですね、歴史というものは文明の中心がある、その風土を変えることによって、世界歴史は進んできたんですよね。とにかく新しい時代というものは、風土を変えることによって、その時代の中心を受け持つ風土を変えることによって、新しい時代が始まった。これは歴史の教訓だ。世界史においてもね、現代、われわれが持っておるこの文明の出発点はアフリカ地方の大地溝帯だ。で、アフリカ中部から北部のエジプトに行き、メソポタミア、地中海、ヨーロッパ、イギリス、アメリカと世界文明の中心はその風土を移し替えてきて、いまや日本の上にある。やがて世界文明の中心は日本から中国へ、中国からインドへと流れていく。それが歴史だ。そのことを考えるならばですね、確実にわれわれが今、しなければならないことの第１番目のこの課題は、大遷都の夢に生きるというね、そういうこの時代をつくることである。**

**そして、われわれは政治を変え、経済を変え、社会を変え、文化を変え、新しい文明をつくっていくという道筋に入っていくんだ。政治においては、政党政治から合議政治へと変えていかないかん。経済においては、市場経済から人格経済へと変えていかないかん。また社会においては、民主主義社会から互恵主義社会へと変えていかないかん。文化は理性文化から感性文化へと変えていかないかん。文明は物質文明から精神文明に変えていかないかん。これがもう避けがたい未来ですよ。俺はその５つの中のどれをやろうか。どの分野で俺は活躍しようか。そういうふうにして、今という時代を生きる使命をわれわれはつかみ取っていけるんですね。そういうふうに変わっていくんやったら、それを変えていくための生き方を俺は何かしら仕事としてしようというね、そういうこの思いを持って、われわれは生きることができるわけですよ。**

**さらに過渡期を担う民族にはね、大きな２つの使命があると。過渡期を担う民族は、その時代の文明の原理を、その質において完成させて終わらせるということをせんといかん。それを現代で言えば、どういうことになるかといったら、われわれは科学技術文明を、その質において完成させて終わらせるという仕事をしなきゃならん民族だ。で、この科学技術文明をその質において完成させて終わらせるとはどういうことなのかといったら、この科学技術文明が世界に量的に拡大していく中で、科学が人類に及ぼした罪を償う。すなわち、自然破壊、環境破壊、人間性の破壊、核廃棄物、この４つの科学の罪というものをですね、日本人が償うための指導力を発揮して、そして、科学技術文明をこれ以上、素晴らしい文明はないと、そこまで持っていってしまう。これがまず日本人がやり遂げなければならない大きな目標だ。その中で自分はどういう役割を果たせばよいのかというような感じでね、使命をつかみ取るという道筋が見えてきます。そして、過渡期の民族は、古い時代を終わらせると同時にですね、新しい時代を呼び起こすという、そういう活動も始めなければならない。さらにその内容を細かく見ていけばね、いっぱい様々な個々のこのやらないかん仕事はいっぱい出てくるわけですよ。そういうふうにしていくらでもですね、われわれは命を燃やすことができる。歴史に名をとどめることができるような生き方を獲得することができるんですね。**

**最後に３番目のこの志、理想のつくり方。これは命の欲求として理想を持つというね、まあ、そういう方法である。すなわち、俺はこんな男になりたい。そうなれるように努力する。それが自分の命を喜ばせる、自分の人生の目的だ。自分の人生の理想だ。そういう形でですね、この命の欲求として、自分の人生というものをですね、つくっていくという原理もあります。これはどういうことなのかといったら、人間の最高の幸せはしたいことをすることだ。したいことができんことは不幸だ。どんな人間になりたいのか。どんな仕事がしたいのか。将来、どういう生活がしたいのか。そういうこの自分のしたいことというものをですね、つかんで、そして、そのしたいことができるようにしていくというね、そういう人生の歩み方もあります。欲求こそ理想だ。理想というのは頭で考えたらいかん。頭で考えた理想は人間を苦しめる、縛る。命から湧いてくる欲求を実現する人生こそ、命に喜びを与える、生きがいのある、自由と開放感を味わえる人生だ。したいことがなければならない。欲求が理想である。なぜならば、欲求がなぜ理想になるのか。欲求はまだ実現されていないから欲求なんだ。欲求というものを原理にして、自分の人生を考える。したいことをやっていく。したいことをやるためには頭を使わないかん。理性を使わないかん。したいことをなんとなくやっておったんじゃ、他人に邪魔される。他人に邪魔されんと、他人に迷惑掛けんと、俺のしたいことを最後までやり遂げる。そのためには理性を使わないかん。みんなに迷惑を掛けん方法を考えないかん。**

**最初は親に反対されておっても、反対してる親を協力させるように仕向けていく。それは理性の使い方だ。どういうふうに自分のしたいことを親に納得してもらって、そして、協力してもらってやっていくという、そういう道筋をつくっていくか。反対されておったら、やりづらいですからね。他人に迷惑掛けとったら、自分のしたいことはできなくなりますからね。だから、頭を使って、したいことができる道筋を切り開いていく。そのために理性を使わないかん。だけど、本当にわれわれが自分らしい人生を生きようと思ったら、まず欲求がないといかん。命から湧いてくる欲求なしには、自分の命を喜ばせられない。まあ、その欲求というものを原理にしながらね、この自分の人生というものを考えていくという、そういう方法もあります。まあ、とにかく志、理想のつくり方には３つの種類があります。この３つの種類の中からね、どれで俺が自分の人生を生き切るか。どういう方法で命の使いどころというのをつかみ取るか。そのことをぜひ考えてみてもらいたいと。というところで、だいたい１時間になりましたので、これから10分間、休憩を入れて、後半の話をまたさせてもらいます。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**司会：ただいまより、集合月曜研修を再開します。芳村先生、お願いいたします。**

**芳村：はい。それでは後半のお話を始めます。第３番目のテーマですけどもですね、この前半では、この大きな観点から、目標、理想、志、命の使いどころというものをどういうふうに求めていったらよいのかということを話しましたけども、今度は個々の、個人のレベルにおいてですね、この自分の命の使いどころ、自分の命が喜ぶ生き方というものをどういうふうに見つけていったらよいのか。その話をしたいと思います。生命の目的と人生の目的というものがどう関連してくるかということなんですけども、この人生の目的ということについてですね、学問的に考えていこうと思ったならば、まずは生命の目的とはなんなのかというところから考えていかないと、人生というものを考える、学問的根拠というものが見えてきません。で、人間も一個の生命ですからね、だから、人間という命の目的というものを明確にしようと思ったならば、一般的に言って、生命の目的とはなんなのかっちゅうことから考えていかなければならないんですね。**

**で、生命の目的とはなんなのかといったら、これはもう生物学で明らかになってるようにですね、まあ、中学の教科書でも出てくるわけですけども、生命の目的というのは２つあると。自己保存と種族保存である。で、この生命には目的があるということが非常に大事なこれは、この意味を持つ考え方なんですね。生命には目的がある。生命には目的があるっちゅうのはどういうことなのかといったら、命というものは、目的を内にはらんで初めて命であって、目的のない生命はあり得ない。なぜそうなるかといったら、その命というものは常に生きてる。生きてるから命だ。生きてるっちゅうことは変化してる。変化には方向性がある。命は確実にある一定の方向性に向かって進んでる。これが時間の矢に従って生きてるという、時間がこの命を支配してるという、そういうことによって生じてくるわけですけども、その生まれたら必ず死ぬというね、そういうこの流れの中であらゆる生命は存在しておる。**

**生き切るということは、この死への時間を生きることである。これが時間の矢に従ってあらゆる命は存在してるということのね、この哲学的な意味なんですけども、とにかくは、この命というものは、目的というものを内にはらんで初めて命なのであって、目的のない生命は存在しない。ということは、どういうことなのかといったら、命は目的を実現するために生きておるのであって、単に生きておるのではない。命は目的を実現するために生きておるのである。ということは、いったいどういうことなのかといったら、命というものは、その命よりも大事なものを内にはらんで持っていて初めて命であって、生きるということは目的を実現するために生きるということなんだ。すなわち、命には、命よりも大事なものがある。命が一番大事なんじゃないんだ。命というものは、なんのためにこの命を使おうか。なんのために死ねるか。何に命を懸けて生きるかということによって、初めて命は命としてのですね、本当のあり方をすることができる。命には命よりも大事なものがある。命が一番大事なものではない。そのことを教えておるのがですね、生命には目的があるという、この事実であります。生命には目的があるっちゅうことは、命が一番大事なんじゃない。命を投げ出しても実現しなければならない目的というものを持っていて、初めて命といえる。目的のない命はないんだ。これは生物学的に言って、生命には目的があるということのですね、哲学的な解釈、意味であります。**

**で、なぜそんなことが言えるのか。その根拠は、命というものはこのためになら死んでもいいと思えるものを持ったとき、初めて本当にその命は生かされ、輝くんだ。命というものは、このためになら俺は死んでもいい。そういうものと出合ったとき、初めて命は美しくも激しく燃え上がる。死んでもいいと思える目的を持たない命は不完全燃焼の命、半端な命、まだ本当には命を生かしていない命の姿だ。その人が目的を持っておるかどうかは別にして、とにかく命そのものは目的を持って存在しておる。その目的は命に潜在しておるんだ。そして、普通の動物の場合、動植物の場合には、それが本能として現れ出てくるんですね。自己保存の欲求、種族保存の欲求として、命から湧いてくるという形で生命の目的が表現される。湧いてくるんだ。命に内在するものが湧いてくるんだ。湧いてくるっちゅうことは、命の中にその目的がこの潜在してる。命は目的をはらんでるということがね、そのことによってわかるわけであります。**

**とにかく、命には命よりも大事なものがあるんだ。命が一番大事じゃないんだ。そのことをまずですね、われわれはつかまなければならない。だけども、この今は科学的生命観が人類を支配してしまってるがためにですね、命以上に大事なものはないんだと思ってしまってるんですね。命あってのものだねと。命がなくなってしまったらぱぁだと。それはそうなんですけども、だけども、なおかつ、この人生を生きるということにおいてはですね、命が一番大事だと思ってはならない。なぜならば、命が一番大事だと思ってしまうと、これをしたら、ひょっとしたら死んじゃうかもしらんからやめとこうとかね、これをしたら、ひょっとしたら怪我するかもしらんからやめとこうとか、これをしたら病気になるかもしらんからやめとこうとかっちゅうてですね、それを恐れてわれわれは勇気のある生き方というものができなくなってしまう。**

**だけども、この人間において感動を呼ぶですね、素晴らしい生き方というのは、みんな命を懸けたときに現れ出てくるんだ。恋愛でもね、本当にその人を好きになったら、必ずどう思うかといったら、もう私はこの人のためだったら死んじゃってもいいわと。俺はこいつのためだったらなんでもしたる。そういう思いになるのはね、一番この恋愛において燃え上がった瞬間なんですよ。そのとき、一番その命が喜んでるときだ。その命が一番輝いてるときだ。命はそれを望んでるんだ。命は燃えて生きることを望んでるんですよ。命を燃やせるものがないということは、命において不幸なことだ。さみしいことだ。そのことを考えてもね、命には命よりも大事なものがある。命よりも大事なものを持ったとき、命は最も美しいんだと。最も輝くんだ。最も命は生かされるんだ。命よりも大事なものを持ったとき、命は最も生かされるんだ。そのとき、命は本当に生きるんだ。そのことをですね、まずわれわれはつかまなければならない。だから、この命をなんのために使うか。なんのために俺はこの命を捨てようか。そのことをわれわれは人生において考えなければね、本当に素晴らしい人生は始まらないんだ。**

**この命をなんのために使って、この命をなんのために捨てて生きるか。この命の使いどころを何に定めるか。なんのためにだったら、俺は死ねるか。そのことを思ったとき、最高の人生が見えてくるわけですね。そして、人間にとって一番素晴らしい人生というのは、死んでもいいと思えるものを持って生きる人生が最高の人生なんです。それ以上の人生はない。死んでもいいと思えるものを持ったとき、命は完全燃焼しますよ。そこにこの命というもののですね、生き方の基本がある。とにかく命には、命よりも大事なものがあるんだ。それを教えてくれるのが、生命には目的があるという生物学的事実です。その生命の目的というのは自己保存と種族保存である。そして、自己保存と種族保存という生命の目的は、どういう形で命に内在するのかといったら、欲求という形で存在するんですね。だから、具体的には、生命の目的というのは、単に自己保存と言わないで、自己保存の欲求というふうに生物学では言うわけですね。また、生命の目的は種族保存の欲求というふうに言うわけであります。すなわち目的は欲求なんだ。ということは、どういうことなのかといったら、人生の目的というものも、欲求として湧いてくるものであって、頭で考えたらいかん。頭で考えた人生の目的というものは、その人の命を苦しめる。頭で考えた計画は人間を支配して、つらい、苦しい人生を強いる。欲求として理想を持ち、欲求として目的を持ったとき、初めて命は輝く。命は喜ぶ。そこには生きがいと自由と開放感がある。したいことをするんですからね、そこには自由がある。開放感がある。**

**だけど、したいことをするということはですね、単にわがままであったり、あるいは自己中心的な、身勝手な欲求であったのでは価値がない。それは社会的価値がない。人間は社会的存在だから、単なるこの身勝手なね、自己中心的なしたいことということは、これは自分をかえって不幸にする。他人に迷惑を掛ければ、他人から批判され、他人から避難されますから、自分を不幸にする。だから、われわれは自分のしたいことはしなきゃならんけども、身勝手ではいかん。自己中心的なやり方ではいかん。自己中心的なやり方をすれば、必ず他人とぶつかって、そして、自分のしたいことができなくさせられてしまう。あるいは、本当に身勝手なことをすれば犯罪になってしまう。自分のしたいことが実現できるどころか、結果としては犯罪者になってしまって、牢屋に入らなければならない。これは不幸な人生だ。そこには本当の人生の喜びなんてあり得ない。であるが故に、われわれは自分のしたいことをですね、どうすれば人に迷惑を掛けない方法で最後まで自分のしたいことをやり通して死んでいけるのかということを考えなければならない。そのためには、自分のしたいことはせないかんけど、できるだけ他人に迷惑を掛けない方法、他人に邪魔されん方法、それを考えなきゃならんから、理性を使わないかんと。そこに理性というものが知恵の能力としてね、成長していくという道筋が開かれてくるわけであります。**

**学校で勉強した知識や技術では、この自分のしたいことをどうすれば他人に迷惑をあまり掛けんとやっていけるかちゅうようなことは、学校では教えてくれません。自分で考えないかん。そのことにより知恵が湧いてくる。そのことによって本当に人間として賢くなる。そのことによって心が成長する。社会性が成長する。他人のことを考えるから、愛が生まれる。そういうふうにして人間は人間らしい人間性というものを獲得していくんですね。理性だけでは心ではない。感性だけでは心ではない。心というのは、理性と感性が協力することによって生まれてくるんだ。自分のしたいことをどうすれば他人に迷惑を掛けん方法で実現できるだろうか。そこに人間らしい心をつくる原理がある。したいことのない人間には心はない。それは機械だからね、したいことのない人間は他人に命令されたとおりにするんだから、そこには心があるはずはない。自分のしたいことがあって、どうすればそれを他人に迷惑を掛けん方法で実現できるだろうかと考え始めると、心が生まれてくる。心遣いのある人間になれる。心遣いとは愛だ。それが成長してきて社会性になる。**

**でも、とにかくは、原理的にいったらですね、この人生の目的も、生命の目的も、欲求として湧いてくるというものでなかったならば価値がない。なぜならば、人間は理想を実現するためには行動しなければならない。頭の中だけに理想があってもね、行動しなきゃ実現できません。その行動力というのは、どうして湧いてくるのか。欲求だ。命から欲求が湧いてくる限りにおいて人間は行動するのであって、命から欲求が湧いてこなくなったら人間は行動をやめるんだ。それが命の基本原理だ。命から欲求が湧いてこない人間が何かしようと思ったら、自分の肉体に理性でむちを打って、無理やりに自分の肉体を動かさなければならない。こうなったら本当に苦しい人生だ。つらい人生だ。そこには生きがいなんてありようがない。命から湧いてくる欲求に従って生きるとき、初めてそこにはより喜びがある、生きがいがある、自由がある、開放感がある。欲求こそ行動力の原理だ。欲求なしには目的は実現されない。**

**だから、会社なんかで数値目標やね、いろんな目標が与えられたときに大事なことは、その目標と自分の欲求をどう結び付けるかという作業をしないと、やる気になってその仕事をするという、そういう活力は生まれてこないんですよね。その目標を実現したとき、俺の人生はどうなるのか。どういう自分のこの欲求が実現されるのか。そのことを考えたとき、数値目標が自分の欲求を実現する目標に置き換えられてですね、そして、よし、やったろうやないかって、そういう気持ちにこうなってくるわけだよね。数値目標だけでは人間は苦しめられます。つらい、苦しい、そういう仕事の仕方しかできない。だけど、欲求と結び付いたとき、命は燃え始める。それが実現されたとき、俺の人生はどうなるのか。どんな素晴らしいことになるのか。どんな未来が開けてくるのか。それがわかったとき、人間はやる気になる。欲求と結び付かなければ、本当のやる気は出てこない。会社から与えられる目標というものが、自分の人生にとってどういう意味や価値や値打ちや素晴らしさを持ってるのか。それを考えて、自分の人生の目標と会社の仕事上の目標とがっちり結び付けたときね、会社の目標と自分の人生の欲求とが『ガッチャマン』したときね、そのとき、『火の鳥』となってですね、命は燃え始めるわけですね。**

**そういう作業をね、各個人でやっぱりやらないかんと。自分でできない場合には、上に立つ者がそういう指導をして、そして、その子の持っておる夢や希望というものを聞いてあげて、その夢や希望が会社の仕事とどう結び付くのかという指導をしてあげないと、その子はやる気になって、目を輝かして、仕事をしてくれるという子にはならないわけですよね。欲求なしにはやる気は出てこない。その仕事に興味や関心や好奇心を持ってですね、やる気になってという、そういう状態になるためには、欲求と結び付かなければならない。欲求なしには行動力は生まれてこない。人間の心というのは、意味と価値を感じる感性ですからね、意味を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火が付かない。燃えてこない。人間の心は意味と価値を感じる感性だ。人間にとっては意味を感じ、価値を感じるということは、ものすごく大事な人生の基本原理だ。意味を感じ、価値を感じれば、興味や関心が湧いてくる。湧いてくるという構造ができるんですよね。興味や関心が湧いてくれば、欲求が湧いてくる。やりたくなる。そういう構造でね、人間は自分の肉体を無理なく動かせるというね、喜びをもって自分の肉体を動かせるという、そういう状態になっていくわけであります。**

**私なんかも、年間300回を超えるね、講演をこなしてるんですけども、普通からいったら、これは本当に殺人的なスケジュールでね、普通でいったら、もう疲れ果ててしまうようなもんなんだけど、だけど、私はこうやって皆さん方に聞いていただくことが無上の最高の喜びなんですよね。すごい幸せを感じるわけですよ。だから、全然疲れない。ますます活力が湧いてくるんですよね。だから、すごく元気なんですよ。もう今年62歳ですけどもね、だけども、まだまだ自分においてはね、衰えを知らないような、そういう活力が湧いてきます。それはやっぱり、やることに喜びがあるからですね。自分がそれを幸せと感じてるからですね。しかも、自分のしたいことをしてるからね、全然疲れない。活力が湧いてくる。これがちょっとでも苦しいと思い始めたら、もう駄目なんですよね。ちょっとでも話すことがつらいなと思い始めたら、もう駄目なんですよ。しかも、私の話は命から湧いてきて話してますからね、全然苦痛がないんですよ。これが大学の先生みたいにね、自分が研究して勉強したことをね、本で読んで学んだことをしゃべっておったら、これはものすごく苦しいですよ。うっかりしたら忘れてしまっちゃったりなんかしてね、どうやったかなと思い始めたら、ものすごくしゃべることが苦痛になりますからね。**

**だけど、勉強してしゃべっておるんやない。命から湧いてきてしゃべっとる。だから、いくらでも出てくる。全然苦しくない。だから続けられるんですね。それほどにね、こう湧いてくるものがあるかどうかはね、ものすごく人生において大きなこの違いとなります。欲求に基づいて、命から湧いてくるもので生きるというね、そういう生き方をぜひ持ってもらいたい。誰でも興味や関心や好奇心を持てばね、それは湧いてくるものが出てくるんですよ。意味や価値を感じれば、湧いてくるものはできてくるんですよ。だけど、自ら今、自分のやってることの意味や価値や値打ちや素晴らしさというものを感じようとしないでですね、ただ言われてるからやってるというね、嫌々ながらやってるという、そういう状態ではこれは仕事もうまくいきませんし、また創意工夫もできませんし、つらい人生になりますよ。だから、どんな仕事もね、価値のない仕事はない。どんな仕事でも、その仕事なしには会社は回らないんですからね。どんな素晴らしいこの価値ある仕事も、どんなに他人から見たらあんまり価値のない仕事でも、その価値のないと思われてるような仕事をやる人がおらんかったら、そのすごい成果の上がる素晴らしい仕事も成り立たない構造に会社はなってますからね。皆、有機的に結び付いてますから、結果としてはどちらが上下ないんです。全部同じ価値がある素晴らしい仕事なんですよ。**

**そういうこの仕事というものが持っておる有機性というものを考えればね、価値なきものは何一つない。みんなかけがえのないですね、重要な役割というのを持って存在してる。命もそうなってるんですよ。命にはいろんな臓器がありますけどね、どの臓器のほうが大事で、どの臓器はどうでもええって、そんなことはないんです。もう全部大事なんですよ。どっかが具合が悪かったら、全部駄目になるんですから。実際問題、指先一つ怪我しただけでもね、なんか仕事はしづらいしね、うっとうしいしね、全体にこう気分的に嫌になってしまってね、どこが悪くってもね、全体が、この全体に影響が出てくるんですよ。だから、組織も有機体ですからね、どんな仕事でも、みんなものすごい重要な価値を全体に対して持ってるんだ。自分がその持ち場、持ち場の仕事を完璧にね、やり遂げようとする意欲なしには、全体がこの機能を停止するというね、そういう状態になる。それが会社という業務のですね、厳しいところですよ。何一つ気を抜いた仕事をしていいというふうな部署はない。みんなそれなりに気を入れてですね、ちゃんとこの真剣に取り組まないと、全体に支障が出てくるというね、そういうことになります。**

**とにかくこの命から湧いてくる欲求というものがですね、非常にその大事な人間の行動力の原理であり、命から湧いてくる欲求こそ、この命が喜ぶ理想というものを自分に教えてくれるもんだ。人生の目標、人生の目的、人生の理想というものは頭で考えたらいかん。頭で考えた途端に苦しくなる、人生は。命から湧いてくるものを持たなければ、人生、楽しくない。したいことをせんことには楽しくない。常に自分がしたいことをしてるっていう状態にすることが大事なんですよ。そのためには、今、自分のやってることに、自分が意味と価値と値打ちと素晴らしさを感じてないといかん。無理やりにでも感じるようにせんと、自分の命に喜びは出てこない。そのためにね、われわれどうするかといったら、感じなかったら理性で考える。今、自分のやってることにどう意味があるのか、どういう価値があるのか、どういう素晴らしさがあるのか、どういう値打ちがあるのか、理性で考える。ああ、こういう価値もあるんだということが自分でわかってくると、だんだん、だんだんですね、理性が考えた価値を感じる感性がだんだん成長してくる。感性が感じたとき、命に火が付くんだ。そのときに人間はめらめらと燃えてくる。やる気が出てくる。やったろうかということになってくる。そういう方法で理性と感性を協力させながらね、自分の人生をつくっていかなければならない。それが人間として生きるということなんです。**

**理性を使わなければ人間ではない。命から湧いてくるものがなかったら、人間ではない。だから両方協力させなければ、また人間ではない。どちらか片方では、感性だけでは野獣だ。理性だけでは人生は苦しい。理性の奴隷になったら苦しい。その理性と感性を協力させることによって初めて人間的というふうにね、言うことができる、人間らしい、素晴らしい人生が始まるわけであります。だけど、基本はとにかくはね、命から湧いてくるものがなかったら話にならん。命から湧いてくるものがあって初めてどう理性を使おうかという順番になってくるのでね、命から湧いてくるものがない状態でどんだけ理性を使ってもね、無味乾燥なつまんない人生で終わってしまうんですよ。ただ苦しいだけ。ただつらいだけ。理性で生きればそうなりますよ。義務と責任感だけではつらい人生。欲求がないと、したいことをやってないと、義務と責任感だけで理性的に生きたら、自分は空しくなります。なんで俺はこんなことしとるんやと、そういうことになってくるんですよ。なんでこんなことせんないかんのやと。なんかものすごく自分がさみしくなってくる。したいことをしておったら、もう永久に燃えますからね。命から湧いてくるものがある限り、永遠の青春なんですよ。命から湧いてくるものがなかったならば、若くたって、もう老いぼれた人生です。**

**まあ、とにかくこの生命には目的がある。命には命よりも大事なものがあるんだ。目的を持って初めて人生だ。目的を持って初めて命だ。目的なしには、命は輝かない。そして、その人生の目的というものは、欲求として湧いてこなければ価値がない。頭で考えたらいかん。欲求として人生の目的をこの呼び起こそうと思ったならばですね、われわれは今、自分のやってることの意味や価値や値打ちや素晴らしさというものを理性で考えて、意味を感じる感性をつくっていく。価値や素晴らしさを感じる感性をつくっていく。その作業をですね、しないと、命から湧いてくるものをつくるという、そういうこのことができません。とにかく感じてこそ人生、燃えてこそ人生、命から湧いてくるものあってこその人生です。だが、それだけでは野獣だ。そこへ理性を付け加えると、素晴らしい人生が始まる。**

**で、この自己保存と種族保存という、この生命の目的はですね、生命全体に共通するものですけども、この自己保存と種族保存というこの欲求がですね、人間という、理性という能力を持つようになった命から出てくるとどうなるか。自己保存と種族保存という生命の目的というものは、人間においては人間的な現れ出方をするんですよね。人間的な現れ出方ということは、理性という能力を持った人間にふさわしい現れ出方をする。じゃあ、自己保存の欲求という、この生命の目的が、人間という命から出てくるとどうなるかというとですね、自己保存の欲求というものが人間という命から湧き出てくると意志になる。意志っちゅったって、Stoneじゃなくて、Willですけどね。石になって固まっちゃってどうするのとね。このStoneじゃない、Willとなって出てくると。意志。意志とはなんなのか。意志というのは、自己実現、自己創造、自己完成の力である。意志というのは、自己実現、自分自身を一個の個性ある存在として、この実現していくための力。自分自身を自分が納得できるようなものに完成させていく自己完成の力。また、この自己創造の力。それが意志の力である。**

**意志の弱い人間は物事を途中で放棄する。納得できる人生を歩むことはできない。だから、まず人生において求められるのは意志の強さだ。意志の強さの究極のものは不撓不屈の意志だ。どんな困難でも乗り越えていくぜ。そういう不撓不屈の意志を持たなければですね、真の意味で自己創造、自己完成、自己実現の人生というものを歩み抜き、歩み切ることができない。納得のできる人生というものを生きるためには、どうしても不撓不屈の意志、どんな困難でも乗り越えていくという、この意志の力が必要だ。なぜならば、人生にはさまざまな悩みがある。さまざまな問題がある。さまざまな苦痛、苦労がある。それを乗り越えていかなければならない。でなければ、自己実現ということはあり得ないと。その意味で、どんな困難でも乗り越えていくぜ。まあ、そういうこの不撓不屈の意志を持つことなしにはですね、自分の人生というものを生き抜くことはできない。本当に自分を大切にして、自分の人生を生きようと思ったならば、そこには必然的に意志の強さが要求される。**

**じゃあ、意志の強さとはなんなのか。意志とはなんなのか。そのことをね、考えなければならない。これまでの哲学においてはですね、意志の強い人というのはどういうふうに考えられたかといったら、意志の強い人っちゅうのは、理性的な人やと思われておったんですね。そして、意志の強い人というのは、自分のしたいことは我慢して、しなければならないことがちゃんと最後までできる。そういう人が立派な人やと、こう言われておったんです。すなわち、意志の強い人というのは我慢できる人やと。我慢できないような人間は駄目やとこう、言われておったんですよ。それが人間の本質は理性だと考えられておった時代の意志の強さに対する理解だった。現在でもそういうふうに考えてる人がほとんどですよ。意志の強い人っちゅうのは理性的な人やと。我慢できんやつは駄目や。これはもう古い人間観から出てくるね、意志についての解釈です。だけど、そういう理性的にですね、理性的に、作為的に、人為的に、無理やりにつくられた意志の強さというものはですね、何か我慢しなければならないものが片っ方にあるだけ、もうすでにその意志の強さというものには限界がある。限定された、有限な意志の強さだ。しかも理性によって作為的につくられたような意志の強さというものはね、何かできないような状況が出てくるとね、またやめる理由を考えてちゃんとやめてしまうもんなんですよ。逃げ道がある。これでは本当の人生におけるね、不撓不屈の意志というようなものはでき難いと。**

**じゃあ、どんな困難でも乗り越えていくというのは、不撓不屈の意志っちゅうのはどうしたらできるのか。どんな困難でも乗り越えていくっちゅうことは、理屈抜きのところにその根拠を持ってないといかんと。じゃあ、意志の強さにおける理屈抜きの根拠とはなんなのか。それは命から理屈抜きに湧いてくる欲求の強さ。それこそまさに理屈抜きにですね、どんな困難でも乗り越えていくという意志の強さの根拠になるもんだ。人間は命から欲求が湧いてくると、行動をやめられない。欲求が湧いてくる限り、人間は行動し続けるんだ。命から欲求が湧いてくるとね、もうやめられない、止まらない、かっぱえびせん状態になってしまってね、もうどうにも止まらないでね、まあ、リンダ状態で突っ走るというね、そういうことになってしまう。まあ、それほどに命が湧いてくる欲求というものは強力に命を支配しね、行動力をこのつくり出す原理なんですよ。命から欲求が湧いてくるとね、本当、止まらないんですよ、もう。最後までやり抜いてしまうというね、そういう活力が生まれてくる。ということは、どういうことなのかといったら、意志の強い人間は、理性的な人間ではない。本当に意志の強い人間は、欲求の強い人間、欲望の強い人間、興味や関心や好奇心の強い人間、認識欲の強い人間、幸福欲の強い人間、欲の強い人間だけが、真の意味で意志の強い人間たり得る資格を持っておる。**

**実際問題、世の中で成功した人物というのは例外なくね、並外れた欲求の持ち主なんですよ。並外れた欲望の持ち主なんですよ。並外れた興味や関心や好奇心の持ち主なんですよ。並外れた認識欲や、並外れた幸福欲を持ってなかったら、並外れることはできないんですよ。並外れないと並で終わってしまう。だから、成功した人というのは、皆、並外れたね、欲求を持ってるんですよ。でないと、行動力というのは続きませんからね。並外れた欲求が、並外れた行動力をつくり、並外れた行動力が、並外れた結果をつくり出すんですよ。欲求の強い人間は、欲望の強い人間、欲求の強い人間だ。命から湧いてくるものが、ふつふつと絶えないというね、そういう状態の人間が何事かを最後まで成し遂げてしまう人間のタイプです。そういうことのためにね、われわれ、どうすれば、常に自分の命から欲求が湧き出てくるという状態を保てるかというね、そのことを考えなければならない。で、そのためにわれわれは理性という能力を手段能力に使って、そして、自分の命からふつふつと抑え難き欲求が湧いてくるという状態を維持し続けるという、そういう生き方をこのセントバーナードなんですね。せんといかん。**

**で、そこでその今、自分のやってることにどういう意味があるのか。どういう価値があるのか。どういう値打ちがあるのか。どういう素晴らしさがあるのかということを考えて、その理性で考えた意味や価値や値打ちや素晴らしさというものを感じる感性をですね、つくっていく。感性が感じたら、とにかくは火が付く。火が付いたら燃えてくる。やめられない、とまらない、かっぱえびせん。そういう状態でですね、われわれは何事かを納得できるところまで成し遂げるという、そういう活力を獲得することができるわけであります。とにかくこの人生には意志の強さが要求される。意志というのは、自己実現、自己創造、自己完成、自分を一個の個性ある存在として、存在感のある人間として、自分自身を完成させていく。その力が意志だと。意志と欲求とどう違うのかといったらですね、欲求というのは、ただこうしたいということで湧いてくるわけですけども、意志というのはそこに理性が付け加わってね、決断ということをしなければならない。欲求をどういう方法で実現していくかというね、決断ということをしなければならない。決断されたとき、意志になる。よし、この方法でやっていこう。そこで意志が決まるわけですね。欲求だけでは、まだこの野獣的なね、欲求だけど、野獣的なそのエネルギーが湧いてきただけだ。それを人間的な意志にするためには理性が加わって、決断しなければならない。すなわち、この方法でやっていこうというね、まあ、そういうこの決断されたとき、初めて欲求は意志になる。**

**決断とはなんなのか。決断というのは、ただ決めるだけではない。決断というのは、あるものを決めたならば、結婚でもね、ある人を選んで結婚したならば、そのとき自分が選び取れなかったものの中にどんな捨て難い素晴らしいものがあっても、あるものを選んだならば、他の人への思いは全部断ち切ってしまうというね、絶つという、このことが決断の断という字なんですよね。あるものを選んだならば、他の可能性は全部断ち切ってしまって、他の可能性を全部捨て切ってしまう。そのとおり決断ということがされて、初めて意識が固まるんですね。よし、これでいこう。こいつと最後まで生きていこう。地獄の底まで付き合ってやるぜ。そういうですね、思いが固まって、自分の個性ある人生が始まる。それが決断というね、意志をつくる原理です。意志は決断によって生まれてくる。**

**まあ、とにかくこの生命の目的である自己保存の欲求というものは、人間から出てくると意志になる。意志とは自己実現、自己創造、自己完成の力である。そして、意志の究極の目的は素晴らしい人生、すなわちこの仕事において成功するというね、自分の思いを最後まで成し遂げるという、この仕事において成功するということが、意志の実現の究極の目的であります。もう１つ生命には目的がある。それは種族保存という欲求ですね。この種族保存という全生命に共通する欲求が命から湧いてくるとどうなるか。人間という命から湧いてくるとどうなるかというと、種族保存の欲求が人間という命から湧いてくると愛になる。愛。愛とはなんなのか。愛というのは、基本的には人間と人間を結び付ける力というふうにね、言うことができるもので、親子の愛とか、男女の愛とか、友情とか、いろんなそういうこのことで、人間と人間を結び付ける力が愛だと。だけども、もっとこの原理的に言うと、愛というのは、単に人間関係において生じるこの意識だけじゃなくてですね、国家を愛する、民族を愛する、仕事を愛する、ペットを愛する。いろんなものに愛は関わるんですよね。ということは、愛とはなんなのかといったら、原理的には、愛とは人間の万物を結合する力というふうにね、言うことができるものです。**

**だけども、この人間の人生ということを考えて、社会というこの舞台を考えるならば、愛というのは人間と人間を結び付ける力であるから、だから、愛は人間関係の力である。意志は自己実現の力であるけれども、愛は人間関係の力であるというふうにこう言うことができる。であるが故に人間関係から生じてくるあらゆる問題は、原理的には愛の問題なんだっちゅうことですね。ということは、人間関係から生じてくるさまざまな問題というものはどういう原因によって生じてくるのか。愛の問題だっちゅうことはどういうことなのかといったらですね、人間関係から生じてくる問題というのは、詮ずるところ、結局のところ、この愛の能力の欠如であるか、愛の能力の未熟さか、あるいは愛の表現方法の間違いか。この３つのいずれかによって人間関係の問題は生じる。愛の能力の欠如というのはどういうことなのかといったらですね、その愛というのは他者中心的な心の表現であって、意志というのは自己中心的な心の表現である。社会というものは、自己中心性と他者中心性とのバランスによって成り立っておるんだ。あまりにも自己中心的になれば悪人、あまりにも他者中心的になればお人よし。どちらも人生を本当には納得のいくものとして生きることはできない。社会は自己中心性と他者中心性とのバランスによって成り立っておるんだ。**

**愛というのは他者中心的な心の働きなんですけども、そのときにね、いろんな仕事をしたり、いろんな人と関わる場合に、この他者中心的な心遣い、他者中心的な心の働きをほとんど忘れてしまって、自己中心的な自分の判断を相手に押し付けたり、あるいは、自分の思うように相手を動かそうとしたり、あるいは、この相手の言うことを無視したり、まあ、そういう自己中心的な関わりをすると、人間関係が崩壊して、人間関係のトラブルが生じます。これがこのまず、人間関係において問題が生じるね、この第１原理である愛の能力の欠如というね、そういうこの原因なんですね。愛の能力の欠如によって人間関係の問題は生じる。それは他者中心的な心の働きを忘れてしまって、自己中心的な、自分の思いだけで物事をさばこうとすれば、必然的に人間関係は崩壊する。自己中心的な心の働きだけで人間と関われば、完全に相手は無視されますからね、だから人間関係の問題がそこから生じてきます。**

**２番目は、この愛の能力の未熟さ。愛の能力というのは、求める愛から与える愛へと成長していく。求める愛は幼い愛であって、与える愛は大人になって成長した父性愛、母性愛というね、自分の子どものためにいろんなものを与え尽くして、見返りを求めないというね、父性愛、母性愛というふうにこう成長していく。子どものころの愛は、愛されたいというね、求める愛だ。だけども、大人になるにしたがって、愛することに喜びを、価値を見いだすというね、そういうこの愛にだんだん成長していく。だけど、死ぬまで人間は愛されたいという欲求はなくならない。だけども、愛されたいという欲求のほうが強いと、人間関係においては問題が生じる。なんで私のことがわかってくれへんのっちゅって人を責める。相手のことをわかってあげようとしないでね、自分のことがわかってもらえないっちゅうことにおいて相手をなじる。そういうところからね、この人間関係は崩壊します。愛があるのにね、未熟な愛だから、恋愛は壊れるんですよ。愛されたいという気持ちのほうが強いと。与える愛という力をつくっていかないと、この愛があっても壊れてしまう。**

**３番目はこの愛の表現方法の間違い。これもやっぱり、愛はあるんだけどね、表現方法が間違ってしまうと、愛は壊れてしまうんだ。人間関係は壊れてしまう。これはどういうことなのかといったら、愛は他者中心的な心の働きで表現をしないと、愛は相手に伝わらない。ところが、多くの場合ですね、愛というものを自己中心的な表現でいってしまうがために、愛がありながらも、深く愛していながらも、その愛がですね、この保てないという、そういう状況で多くの人が苦しむんですね。で、どういうことなのかといったら、愛してるからね、こんなに私があなたのことを心配して愛しておるのに、なんであなたはいつもそうなのとこう言ったりなんかすると、これは自分の愛の押し付けなんですよね。冷静に考えれば愛されてることは十分にわかってんだけど、なんであなたはそうなのとこう、愛を押し付けられてしまうとね、それが苦しくなって、つらくなってね、うっとうしくなってね、逃げてしまうんですよ。愛されてるんだけど、わかってんだけど、逃れたくなるんですよ。縛られるのが嫌なんですね。で、ついつい夜の町にさまよい歩いてしまっちゃったりなんかしてね。行かんでもええとこ行ってしまったりなんかしてね。で、不倫というようなことになってしまったりなんかしてね。愛されてることがわかってるのにね、押し付けられるとね、嫌になるんですよ。これは愛の表現方法の間違いなの。愛は他者中心的な心の働きで表現しないと、愛は相手の心に響かない。自分の愛を押し付けたら、愛は壊れる。愛があるのに壊れてしまうんだ。**

**お父さん、お母さんは自分の子どものためにね、いっぱい愛を注いでるんですよ。で、子どもも頭で考えたら、自分が愛されることはわかってるんですよ。だけど、お父さん、お母さんが自分を愛するが故にいろいろ注意してきたり、叱ってきたり、いろんなことをしてくれるんだけども、それがうっとうしいんですよね。で、子どもが、自分が求めてる愛と親が自分に与えてくれる愛にはものすごく大きなずれがあるんですよね。俺はそんなものは求めてないと。そういう形でね、愛があるのにね、その愛が相手に伝わらない。お父さん、お母さんが、親の立場から心配してものを言う。すると、子どもにとっては、それはうっとうしいんですよね。まあ、だいたい恋愛なんかし始めてね、15歳から20歳ぐらいまでの間にいろいろとお父さん、お母さんが心配して、そんな子と付き合ってどうするのとか、いろいろ言われると、むかついてきてね、心配してくれてるんだけどね、なんかそれがうっとうしいしね、煩わしいしね、しゃくに障るしね、なんかこう、むかついてくるんですよね。わかっててもね、その愛に反抗したくなって、その愛から逃れたいというね、まあ、そういうふうなことになって、人間関係はうまくいかなくなってしまう。**

**とにかく人間関係が壊れる基本原理はね、この人間関係をつかさどる原理は愛だから、だから人間関係が壊れるのは、この愛の能力の欠如か、愛の能力の未熟さか、愛の表現方法の間違いか。この３つのいずれかがですね、この人間関係において問題が生じる基本原因です。まあ、とにかく愛というのは、そんな意味で、人間関係の力である。意志が自己実現の力であるのに対して、愛は人間関係の力である。まあ、そういうふうにこう言わなければならない。そして、愛の究極の目的はなんなのかといったら、素晴らしい人間関係をたくさんクリエイトすることだと。自分の周りに素晴らしい人間関係が増えてくれば、人生は楽しい。幸せだ。だけど、自分の周りにこの嫌な人が増えてくれば人生は不幸だ。だから、愛というのは、自分の周りに素晴らしい人間関係をたくさんつくり出すこと。これは愛の目標であって、それが自分のまた幸せの原理になるわけですね。まあ、そういうふうに考えていったらですね、その命の目的は自己保存と種族保存ですけれども、人間における人生の目的は意志と愛だというふうに言うことができる。**

**人生の目的は意志を実現することであり、愛を実現することである。それしかないんだ。人生の目的をお金に置いたら、人間は途端に不幸になってしまう。金に支配されてしまう。人間の生きる目的は意志に置かなければならないし、愛に置かなければならない。なぜか。それは命に内在する、命の目的は意志と愛しかないんだ。金は意志を実現し、愛を実現した結果、外から入ってくるもんだ。命の外にあるものに人生の目的を置いたとき、不幸が始まる。名誉とかね、地位とかね、権力とかね、そういう命の外にあるものに目標を置いたら、人生は不幸になってしまう。命に内在する命の目標、目的というものを実現する人生を歩まないと、人間は幸せにはならない。幸せな人生を歩みたいと思ったら、人生の目的は、意志を実現し、愛を実現することである。意志を実現するとはなんなのか。意志を実現するとは、この自己実現、自己創造、自己完成、自分を一個の個性ある存在として完成させていくという、この思いを持って、そのためにはどうしたらいいのかを考えていく。もう１つは、愛を実現する。素晴らしい人間関係をたくさんつくっていく。そのために努力する。この２つさえできたならば、必ず人生には大きな成功がある。必ず人生には素晴らしい幸せな結果が待っておる。だけど、この自分自身を一個の個性ある存在として、存在感のある人間に成長させていくということを怠り、また素晴らしい人間関係をたくさんつくっていく努力をし続けることがなかったならば、人間は確実に不幸な人生を歩まなければならない。**

**結局、人間の本当の幸せというのは、仕事において成功することと、素晴らしい人間関係を持つ以外に人間の本当の幸せの原理はないんだ。どんなに仕事において成功しておっても、人間関係において恵まれなければその人は不幸だ。どんなに素晴らしい人間関係を持っておっても、仕事で失敗してるようじゃ、またその人は不幸だ。本当の幸せの実感は生まれてこない。人間的な幸せというのは、仕事の成功と素晴らしい人間関係。両方が整ったとき、初めて本当の命の奥底から湧いてくる幸せ感が、この感じられてですね、本当に生きがいと充実感が感じられるんですね。どんなに素晴らしい能力を持っておっても、社会においては、人間関係なしにはその能力は生かされない。だから、社会に出れば、人脈、人脈といってね、素晴らしい人間関係をどれだけたくさんつくれるかが会社の発展を決定し、また仕事がうまくいくかどうかを決定していくということでですね、素晴らしい人間関係をつくる力というのが社会においてはものすごく大事だと。だけど、そのためには、その前にこれが俺の力だと、俺はこれで生きていくという能力をつくっておかないと、能力なしにはね、いかに素晴らしい人間関係も、自分を社会において生かしていくという、まあ、そういうこの役割を持つことができませんからね。**

**だから、どんなに素晴らしい人間関係を持っておっても、能力がなかったら、結果としては相手に振り回されてしまう。自分が空しくなってしまう。あまりにも他人のことばっかり考えておったらね、どうしても相手の思惑によって自分が振り回されて、自分が空しくなる。自分に力があって初めて相手の役に立って、相手から感謝してもらって、そして、また自分も相手に助けられ、また感謝をする。この自己中心性と他者中心性のバランスが社会なんですよね。助けてもらうばっかじゃ、これは悲しい。助けてあげるばっかでも、また苦しい。助けてあげて、助けてもらう。これがある程度、バランスが取れたところで、素晴らしい人間関係ということになるんですね。助けてもらえない人は不幸ですよ。助けてあげるばっかじゃ苦しいですよ。とにかく自己中心性と他者中心性のバランスが人生であり、社会であり、また人間の幸せの原理だ。その意味で人生は意志と愛のドラマだ。人生は意志と愛のドラマだ。人間、本当に素晴らしい人生を生きようと思ったら、心から愛するものがなければならない。また人生を懸けて維持するものがなければならない。心から愛するものもなく、また人生を懸けて維持するものがなくて何が人生だ。愛するものなしに、愛されたいという願いを持ったならば、それこそ不幸の原因だ。愛するものがあってこそ、幸せな人生。愛するよりも愛されたいというね、気持ちを強く持ってしまったら、それが不幸の始まりだ。その心は決して満たされきることはないからね。**

**愛することの喜びを感じ始めたとき、初めて社会において幸せな人生というものをつくっていける道筋に入れる。愛すれば、愛されますからね。だけど、愛することをしないで愛されるということを求めてしまったら、決して満たされませんからね。だから、もう永遠に不幸です、これはね。多くの美人がね、不幸な人生を歩むのはそのためなんですよ。自分はきれいだから、愛されるもんだと思ってしまってんですね。で、自分が愛する努力をしない。だから、婚期がどんどん遅れて、なんでこんなきれいな人が、なんで結婚できへんのやろうなと思ってるんですけどね、なかなか結婚できないんですね。それは愛するという行為が少ないからね、愛されたい、愛されたいと思ってるだけなので、なかなか相手を決められないんですよね。いろんな男が寄ってくるからね、どれにしようかなと思ってる間に、だんだん婚期が遅れていっちゃったりなんかしてね、なかなか結婚できない。愛されたいと思うその思いが自分を不幸にしてしまってるんですね。愛するということは、とにかく特定の人を愛することになりますからね。そのときに初めて幸せというものを自分が獲得できるね、そういう道筋に入ったということになるわけですよね。**

**とにかく、この本当に幸せな人生というものを自分が送ろうと思ったらね、心から愛するものがなければならない。そして、人生を懸けて維持するものがなければならない。心から愛するものもなく、人生を懸けて維持するものもなくてなにが人生だ。それがあってこその人生だ。人間はみんな原理的にはね、自分が維持するもののために生きて、自分が維持するもののために死ぬのである。人間はみんな自分が愛するもののために生きて、自分が愛するもののために死ぬのである。それが人生だ。愛されたいと思う欲求には、燃えるということがない。愛することによって初めて命は燃えるんだ。愛されたいという気持ちが強ければ強いほど、その人は不幸だ。命の充実感はない。喜びはない。愛するものを持ったとき、初めて人間としての人生の幸せの道筋が開けてくる。心から愛するものがあってこその人生。命を懸けて維持するものがあってこその人生。人生は意志の愛のドラマだ。生命の目的は自己保存と種族保存だけど、人生の目的は意志と愛だ。意志を実現し、愛を実現していく。仕事において成功する。そして、この素晴らしい人間関係をたくさんつくっていく。これだけが人生幸せの原理だ。人間的な人生の幸せは、その２つの両輪によって成り立っておる。**

**じゃあ、この意志を実現するというね、この自分らしい自分の成功の人生をつくっていくということをするためにはどうしたらよいのか。意志を実現するとは何を実現することなのか。自己を実現するとは何を実現することなのか。実現する価値がある本当の自分とはなんなのか。自己実現の人生というものを歩もうと思ったらですね、われわれは何を実現することが自己を実現することなのかを知らなければならない。実現する価値がある本当の自分とはなんなのかということをつかまなければならない。本当の自分というものをつかまなかったならば、自己実現の人生を歩むことはできないし、また本当の自分というものをですね、この納得させる生き方というものをつくっていくことはできません。本当の自分とはなんなのか。これまでのですね、この哲学においてはね、本当の自分というものは変化しないもんだ。変化するものは、これは偶然的なものであってね、頼りにならんと。変化しないものこそ本当の自分だというふうに考えてきたんですよ。**

**だから、心理学においても、あるいは易とかね、占星術なんかにおいても、あなたはこういう星のもとに生まれました。こういう性格です。こういう適性です。こういうふうな本質を持ってます。そういう変わらないものを教えられて、それが本当の自分なんだとか思ってきてしまったんですね。だから、みんなこの本当に素晴らしい人生をつくれなかったんですよ。**

**なぜかといったら、変わらないようなものをどんだけ教えてもらってもね、自己実現とは自分を成長させ、自分を変化させることなんだから、変わらない自分をつかんでも、自己実現、自己創造、自己完成の人生というものを生きることはできません。その性格とか、適性とかね、そういうものを教えてもらっても、人間関係には足しになりますけどね、人間関係には足しになりますけど、自己実現の人生を生きるための原理ではありません。自己実現するとは自分を成長させることなんだ。自分を変化させることなんだ。だから、変化しない自分じゃなくって、変化する可能性のある自分というものをつかまなければ、自己実現に値する真実の自己とは言えない。じゃあ、変化する自分というのはどうしたらつかめるのか。それをつかむ方法は３つある。３つの原理がある。で、成長する自分というのはですね、哲学的に分析すると、３つのあり方が出てきて、自分の意志に基づいて自分をこう変化、成長させていくという、そういうこのやり方と、もう１つは、自分はこうなりたいと思っておっても、なかなかそうはなれない。人生というのは、出会いに基づいてね、いろいろ振り回されてしまったりなんかしてね、こんな女に誰がしたっていうことがあるわけですよね。私はこんな女になると思ってなかったのよと。こんなのと結婚しちゃったから、こうなっちゃったのよというね、そういうこの出会いに基づいてつくられていってしまう自分という人生もあるわけなんですよ。**

**で、もう１つは、まだ出てきていない命に潜在する自分というものがある。この変化し、成長する自分というのは、原理的にはこの３つのあり方をもって存在するわけですね。自分の意志に基づいてつくっていく自分と、出会いに基づいてつくられていってしまう自分と、まだ出てきていない命に潜在する自分。この３つの自分のあり方がね、原理的には存在します。これが自己実現に値する、真実の自己をつかむ方法です。大事なことは、本当の自分というものは変化しない自分じゃない。いわゆる自己実現に値する本当の自分というのはね、自己実現に値する本当の自分というのは、変化する自分でなければならない。変化しないような自分もあるんですけども、だけども変化しないような自分をつかんでも、自己実現、成功の人生というものを歩む糧にはなりません。自己実現とは、自分を成長させること、変化させることなんだ。だから、変化しない自分をつかんでも意味がない。じゃあ、変化する自分というのはどうしたらつかめるのか。それをですね、この自分の意志に基づいてつくっていく自分という観点から考えたらどうするかといったらですね、まあ、とにかくその人生を生きていくためには意志の強さが必要なんだ。だから、欲求が湧いてくるという構造をつくらないと、人生の理想というものを持つことはできない。**

**その意味で、この意志に基づいてつくっていく自分というものをつかむということはなんなのかといったら、人生の理想というものをね、どうつかむかということなんですけども、そのためには、この自分が自分の理性を使って、自分の命に、自分の感性に問いを発するんですね。どんな人間になりたいのか。どんな仕事がしたいのか。将来どんな生活がしたいのか。この３つの問いを自分に掛けて、そして、自分の命から、俺はこんな男になりたい。私はこんな女になりたい。またこんな仕事がしてみたい。将来こんな生活がしたいというね、欲求、欲望を命から呼び覚ます。この方法をまず用いることがですね、まず自分の人生、自己実現の人生をつくっていく第１原理です。理性を手段能力に使って、自分の命に、自分の感性に問いを発して、問いを発することによって自分の命から、欲望、欲求を呼び覚ますんですね。俺はこんな男になってみたい。俺はこんな男になりたいんだ。それを実現することが君の人生だ。それを実現するところに君の命の喜びがあるといえるんですよ。欲求というものが湧いてくればね。俺はこんな仕事がやってみたい。それを実現、それができるようにしていくことが君の人生だ。それをできるようにしていくことが君の生きる喜びだ、生きがいだ。そういうふうに言えるんですね。将来こんな生活がしたい。そのために今、どうせんないかんかということになってきて、人生がこの希望へのレールに乗るわけですね。とにかく理性を手段能力に使って、自分の命から欲求、欲望を呼び覚ます。この方法を使うことが、まずは自分の自己実現の人生を生きる基本原理です。**

**２番目のですね、出会いによってつくられていってしまう自分ね。出会いによってつくられていってしまう自分というのは３つあるんですよ。これは性格と長所、短所。性格も長所も短所もね、出会いによってつくられていってしまうもんであって、自分でつくるもんじゃない。性格っちゅうのは、こんな性格になろうと思ってなった人間、誰もいませんからね。気が付いたら、こういう性格になっちゃってた。なっちゃんていうジュースもあるんですけどね。このなっちゃうもんなの。なっちゃうものはね、自分の意志ではどうしようもないのでね、なっちゃうままに放っておくよりしょうがないもんなんです。性格を触ったらね、病気になりますから。性格、個性ですから、変えたらいかんのんですよ。性格は変えたらいかん。性格こそ個性ですからね、触ったらいかん。もうそれを引き受けて生きていくっきゃないんですよ。性格はそう簡単に変わらん。長所もこんな長所のある人間になろうと思ってなったんやなくて、気が付いたらこういう長所があっちゃったんですね。短所も気が付いたらこういう短所のある人間になっちゃってたんですよ。この性格、長所、短所は、出会いに基づいてつくられていってしまう自分なの。で、この性格、長所、短所、この３つの中のどれがね、実現する価値がある本当の自分なのかといったら、長所、性格は変わりませんしね、短所を実現しちゃってどうするのということになりますからね、長所しか実現する価値がある本当の自分はない。長所を伸ばして、存在感のある能力を持った自分をつくる。これがこの自己実現というね、道筋を歩んでいくための、また基本原理だ。長所を伸ばして、存在感のある能力を持った自分をつくる。**

**だけど、長所とはなんですか。長所というのは、生まれながらに持って出てきた天分が出会いによって引き出されてきたときに長所っちゅうんですね。長所の根底には天分がある。いかに素晴らしい天分を持っておってもね、いい出会いがないとね、その天分は出てこれない。だから長所だけに目を奪われてしまってると、本当の自分の自己実現ということはできないんですね。そのためには、長所の根底にある天分を知るということをセントバーナードなんですね。天分を知るためにはどうするかといったら、前、天分を発見する５つの方法というのをね、もうこれを何回もこの講座でお話をしてますから、覚えてらっしゃる方がほとんどだと思うんですけども、忘れてらっしゃる方もいらっしゃるかもしれませんけど、その天分を発見する方法をね、思い出してもらって、その方法で自分が世界一になることができる能力を模索する。天分というのは、天から分け与えられた能力のことですから、その人が世界一になることができる能力だ。人間皆、天分がある。天分があるっちゅうことはなんなのかといったら、その証明はなんなのかといったら、人間皆、顔が違う。顔が違うということは、いったいなんなのかと。顔を決定してるのは遺伝やと。遺伝子が顔を決定してる。遺伝子とはなんなのか。染色体の中にある遺伝子とは潜在能力だ。この潜在能力によって、潜在能力である遺伝子によって、みんなの顔の形が決定される。その顔の形はみんな違うんや。ということは、潜在能力が違うんやっちゅうことですね。で、その潜在能力が天分なんだ。顔が違うっちゅうことは、俺にはほかの人間はできない何かができる。俺にしかできんことがある。俺が世界一になる能力を必ず持ってるんだ。オンリーワンかナンバーワンか、どちらかで俺が最高という、そういう能力、そういう分野があるんだ。そのことを証明してるのが顔なの。そのために長所の根底にある天分のつぼにはまる人生というものをね、歩むことが自己実現ということのまた大きな方法であります。**

**３つ目はね、命に潜在する自分。命に潜在する自分というのは、どうしたら発見できるのかといったら、今、自分に与えられてる仕事を一生懸命にする。今、自分に与えられてる仕事を一生懸命にすると、必ず現実は不完全だから、ここのところもうちょっとなんとかならんかなって、そういうこの現実への違和感というね、問題意識が湧いてくる。このところ、もうちょっとなんとかならんかなって、これはなんなのか。それは、おまえこそまさにそこのところをもうちょっとなんとかするためにこの時代に生まれてきて、そこにおるんだ。おまえが今、そこにおる存在理由は、今、それをするためなんやっちゅうことをね、自分に教えてくれてるという、そういうこの現象なんですよ。なんか納得できんな。おまえこそ、まさにそこのところ、もうちょっと納得できるものにするためにこの時代に生まれてきたんや。そして、そこにおるんや。今、それをせんないかんぞということをね、教えてくれてる。自分の使命、自分の生きがい。これは俺がやった仕事やというものを残して死んでいくというね、そういうこの価値ある仕事を教えてくれてるという現象が、この現実への違和感というね、そういうこのことなんですよ。**

**とにかく、この自己実現の人生というものを歩んでいこうと思ったら、この３つの方法のどれかで、本当の自分、真実の自分というものをつかまなければならない。そのことによって、自分の人生の目的というものがはっきりするわけですね。何をやって生きていったらよいのか。俺の命の使いどころはどこなのか。それがこういう方法によってわかるわけであります。というところで、今日は話を終わっておきたいと思います。どうもありがとうございました。**

**司会：ありがとうございました。**